

道

求



第
五
號

第
拾
卷

大正四年六月三十日發行（每月一號）

求道第拾卷第五號目次

求道

能令瓦礫變成金

講義

『教行信證』信卷三信釋

第八席

信樂釋 (厭離穢土欣求淨土)

告白

入信の栞

講話

智愚の毒を滅す

一 機縁純熟
二 わかるわからぬて助かるのてない

近角常觀

吉田藤吉

近角常觀

求道

第十卷
第五號

能令瓦礫變成金

彼佛因中立弘誓。

不簡貧窮將富貴。

不簡多聞持淨戒。

但使廻心多念佛。

聞名念我惣迎來。

不簡下智與高才。

不簡破戒罪根深。

能令瓦礫變成金。

是れ實に慈愍三藏が般舟三昧經によりて作れる語なり、法然上人か選擇本願を説きたまひたる時、何時も必ず引用したまひたる文なり。即ち選擇集に曰、若し夫れ造像起塔を以て本願と爲さば、貧窮困乏の類定て往生の望を絶たん、然るに富貴なる者は少く、貧賤なる者甚だ多し。若し智慧高才を以て本願となさば、愚鈍下智の者定て往生の望を絶たん、然るに智慧ある者は少く愚痴なる者は甚だ多し、若し多聞多見を以て本願となさば、少聞少見の輩定て往生の望を絶たん、然るに多聞なる者は少く、少聞なる者甚だ多し、若し持戒持律を以て本願と爲さば、破戒無戒の人定て往生の望を絶たん、

三 信仰上三種の傾向
四 不思議の眞意の頂けて無い人
五 不思議の味ひ
六 意外なる西岸上の喚び聲
七 やるせなき大悲のみ心
八 道徳と信仰と矛盾せる間は
九 我等の隔て根性
一〇 「げにはこれ候へ」
九州傳道所感
近角常觀
雜錄
每日曜午前九時
求道學舎
〔本郷區森川町一帯地〕
每土曜午後二時
第一求道會
〔九段坂佛教俱樂部〕
每月二日午後七時
第三求道會
〔日本橋彌敷町説教所〕
〔七月第三土曜以後夏季中總テ休講〕
然るに持戒なる者は少く破戒なる者は甚だ多し、自餘の諸行に準じて應に知るべし、當に知るべし上の諸行等を以て本願と爲さば往生を得るものは少く、往生せざるもの多し、然れば則彌陀如來法藏比丘の昔平等の慈悲に催され、普く一切を攝せんが爲に造像起塔等の諸行を往生の本願と爲さず、唯稱名念佛の一行を以て其本願と爲す也と、而して此文を引用して證としたまへり。嗚呼如來は此くまでも我等が根機を洞察したまへり、如來此くまでも我等が罪惡を憐愍したまへり、如來は此くまでも我等が無智を照見したまへり、如來は此くまでも我等が煩惱を捨棄したまへり、實に我等は煩惱の塊なり、我等は罪惡の結晶也、愚痴無智の一塊肉也、瓦なり、礫なり、土なり、石なり、鐵なり。しかるに大悲の御心は殊に瓦礫頑石の如き我等を哀愍悲憐して飽までも見捨てず救濟せんと宣へる、是れ若不生者の弘誓なり、攝取不捨の本願なり、此本弘誓願あるにあらざれば無慚無愧の我等いかでか光明に接したてまつるべき、幸に大悲大悲の御力に打勝たれて、如何に不眞不實の我等も初めて如來の膝下に廻心懺愧し奉るべき也。
我等過去を顧るに自ら理想を形作りて、自ら清淨なりとし、自ら眞實なりとして、以て心中自ら頼みとしたることありき、

否信後の今日と雖猶常に之に走らむとしつゝあり、而して自ら眞實なりとするが爲に他を不眞實なりとし、自ら清淨なりとするが爲に他を不清淨とす。而して他を不清淨なり、不眞實なりとすることが、既に大なる不眞實不清淨たるを悟らず、聖人曰く、一切の群生海無始より以來乃至今日今時に至るまで穢惡汚染にして清淨の心なく、虛假偽にして眞實の心なしと、かくの如く經去り經來れば、自ら理想を形作りて以て自ら高しとすること悉く皆迷妄なり、誤りなり、此に於て富貴も以て貴とするに足らず、高才も以て高しとするに足らず、多聞も必しも何等の力もなく、淨戒必しも清淨なりと言ふべからず。是所謂定散自力の權假の清淨眞實なり。一たび此點に想到せば、我等は不眞實の塊也、不清淨の塊也、既に是れ下智也、無智也、愚痴也、破戒也、無戒也、罪業深重の一塊肉也。予十七年前煩悶極りて心中闇黒を以て蔽はれたるの時起りたる最後の感想を回想せずんばならず。以爲らく既に學問も何の益もなく、才智も何等の力もなく、嘗て萬物の靈として自ら誇りし昔の大に誤たることを悟れり、今や實に煩悶の一塊肉として殘されたること路傍の土塊瓦礫と何の選ぶことかあらむと、嘗て空想に耽りて以爲らく、彼の磊々たる木石

亦吾人の想到すべからざる感覺を有して宇宙に自立自存するにあらざらんやと。而して此時恰も正反對の思想起りて我智識ありと稱すと雖、心中常に煩惱の爲に蔽はれ、罪惡の爲に苦しめらる、實に彼の無識頑冥の木石の磊々たる何の選ぶところかあらむと、是實に吾人の眞實なり、吾人の無價値なり。此頃此慈愍三藏の偈を讀みて瓦礫の文字に到りて過去を想到せずんばならず、而して今猶吾人自身を顧みるときは依然として舊の如く、瓦礫なり、木石なり、土塊なり、聖人曰く、誠に知んぬ悲哉愚癡愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻づべし、傷むべしと、嗚呼當時我を介抱し、我を看護したまひし母公の猶、我を護持養育したまふを思へば、恰も阿闍世王の韋提希夫人に於けるが如し。而して聖人特に之を信後悲愍の下に引用したまふを見れば、我等は現に是れ罪惡生死の凡夫、煩惱惡業の一塊肉として、瓦礫木石と異なることなきを感せずんばならず。蓮如上人曰く、其御恩を知らざるものはまことに木石に異ならんもの歟と。南無阿彌陀佛。此の如く不眞實なる我等に對して飽まで見捨てたまはざる清淨眞實の友なきや、此の如き瓦礫土塊の我等に對して徹底

貫通する慈悲なきや、我若し清淨ならば人亦清淨を以て我を迎へん、我若し眞實ならば人亦眞實を以て我を遇せん、されど、我毫も清淨なく眞實なし、此如き不清淨不眞實なる我に對して誰か清淨眞實を以て迎ふべき、されど我等無始より已來今日今時に至るまで穢惡汚染にして清淨なく、眞實なし、其不清淨不眞實なるにあきれずして之を悲憫して、飽まで見捨てたまはざる清淨眞實の御親こそ、實に阿彌陀如來にてまします、否其大慈悲大誓願の本源より永劫清淨眞實の御心を以て我等を悲憫したまふ結果、遂に正覺を成じたまひし御姿こそ即ち今の阿彌陀如來にてまします。彼佛の因中弘誓を立てたまへり、名を聞いて我を念せばすべて迎え來らん、予嘗て煩悶に陥りて其極に達して瓦礫土塊の感をなしたるの後、初めて内心一點の光を認めたるの時以爲らく、予が如き穢惡汚染のものにあきれずして之を悲憫したまふ、慈大悲の塊は即ち阿彌陀如來なりと、此に於て以爲らく、佛はこれ慈悲の塊也、惠の結晶也、いかなる罪惡の塊も融かされ、いかなる愚痴の結晶も照さるゝなり、闇黒なる鐵の如く、頑冥なる瓦礫の如く、冷かなること氷の如き、我等も慈悲の塊たる佛陀に融かされ、智惠の光明に照され、煩惱の氷解けて功德の水となり、鐵も石

も溶かされて悉く慈悲の光耀の金と成るなり、唯廻心して多く念佛せしむれば能く瓦礫をして變して金と成らしむと、實に是予が入信當時の實験を回想せずんばならず、昨の煩悶は忽にして今日の光明となり、昨の暗黒は今日の慈悲となり、煩惱を斷ぜずして菩提を得、生死即ち涅槃なりと證知せしむ。和讃に曰く、無碍光の利益より、威德廣大の信を得て、かならず煩惱の氷とけ、すなはち菩提の水となる、罪障功德の體となる、氷と水のごとくにて、氷多きに水多し、障多きに徳多しと。我等が信仰の上に於て、特に最も味ふべきは能令の二字なり、實に是れ他力の至極をあらはし、如來の大悲を盡くされたるものなり、西岸上の教勅に曰く、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らんと、愚を鈔に曰く、能の言は不堪に對する疑心の人也と、實に如來の御力の廣大にてましますことをいたゞき奉れることろなり、瓦礫をして變して金と成さしめたまふ如來の御力なり、而して此御力を心中に深くいたゞき奉る信相も亦此能の一字をいたゞくにあり、蓋し信心といふは他にあらず、我等が罪業深重と、其罪業に打勝たたまふ如來の御力との力較べなり、能の一字は實に此如來の御

力を示したまへる御言なり、而して此一字を心中に深く味ひ
 奉るは即ち大悲に夜の明けたる姿なり、抑々信の一念とは如
 來の眞實と我等が不實との角力なり、信仰せざる以前は勿體
 なくも如來の大悲に對して我等が反抗し奉る有様なり、唯信
 鈔に曰く、世の人常に以爲らく、佛の願を信ぜざるには非れど
 も我身の程を案するに罪障のつもれると多く、善心の起ると
 少し、心常に散亂して一心を得ることなく、身長へに懈怠にし
 て精進なることなし、佛の願ふかしと雖いかてか之を迎へた
 まはんと、此心まことに憍慢を起さず、貢高のこゝろなし、し
 かはあれど佛の不可思議力を疑ふのとがあり、佛いかばか
 りの力ましますと知りてか、罪惡の身なればすくはれがたし
 と思ふべきと、かくの如く我身の罪業の深さを歎くも、結局如
 來の御力に打勝ちて、佛の願深しと雖いかてか之を迎へたま
 はんと思ふなり、是實に愚妄鈔に不堪と宣へる意なり、畢竟疑
 心の人なり、しかるに如來の御力は願力無窮にして我等が罪
 業深重をも重しとせず、佛智無邊にましませば散亂放逸をも
 捨てたまふことなし、如何なる罪業深重なる我等も如來の御
 力の深重にましますに打勝たれて、此如き罪業深重の我等に
 あきれたまはず、益々之を悲憫したまふ御慈悲の不可思議を

信じたてまつる也、不思議といふは罪業深重の我等が不實に
 あきれたまはざる如來の清淨眞實の窮りなきに驚きたてまつ
 る言なり、此の如く我身の惡しきを歎くも畢竟如來の御力を
 疑ふことなりなりて、結局如來の御力に反抗し奉る態度なり、
 況んや正面より如來の存在を疑ひ我身の惡しきをも悟らず、
 我身の不實をも不實とも思はずして、之がために大悲の御胸
 を傷ましめたまふ如來の清淨眞實を空しくするは、最も正面
 より反抗し奉る態度なり、されど此の如き態度を以て如來に
 向ひたてまつれども、如來はまず／＼此の如き我等を見捨て
 たまふことなし、遂に此の如き不實を咎めざるのみならず、
 寧ろ此の如き不實なる點を特に憐れみたまふ御力の深くまし
 ますが爲に、宿善開發の時到りぬれば、我等が嘗て反抗し奉り
 しだけます／＼我等が惡しきを知り、我等が疑ひたてまつり
 しだけ、ます／＼大悲の廣大なるを信じたてまつる、如何な
 る強情我慢の我等も如來の大悲極りなきに打勝たれて、眞心
 徹到の曉廻心懺悔の涙に泣かざるを得ず、是實に能令瓦礫變
 成金の眞義なり、淨土論に能令速滿足功德大寶海と宣へる亦
 此意にてまします、此の如く我身を歎くも、反抗するも如來
 の御力を疑ひて之を空しくするのみならず、自ら罪を甘受し

如來に面從しつ／＼而も如來の御苦勞を空しくすることあり、
 是れ他力信仰者の最も戒しむべき點なりとす、眞に大悲に醒
 めずして先づ自ら淺聞しきものなりと頭を下げ、言のみを以て
 此の如きものを助けたまふは如來なりと言ふが如きは、畢
 竟大悲の御心をいたゞがずして、既に自ら知り了せるが如き
 言をなすものにして、自ら頭を下ぐるは所謂體をかはして如
 來の御力を以て空を打たしめたてまつるなり、夫入信の經驗
 は、初めより豫想されたる如き信仰に入るものなし、我等が如
 來に負けて信を取るなり、思ひ掛けなき經驗を以て信心をい
 たゞくなり、我等は自己を正しとする時は如來は消え失せた
 まふなり、我等は自己を罪深しと歎くときも如來の御力を空
 しくしたてまつるなり、初より罪深しと頭を下げたるときは、
 如來の御心配を水泡に踏せしむるなり、御慈悲を知り了せる
 が如く考ふるは、未だ佛智不思議を了知せざるなり、此の如
 く不實を飽まて見捨てたまはざる清淨眞實の御心は如來の大
 悲大願也、すべて水火の二河に墮せんことを畏れざれと宣ふ
 は如來の御心なり、眞心徹到したるの一念初めて過去の一切
 皆罪惡たることを自覺する也、煩惱具足の我等は何れの行に
 にても生死をはなることあるべからざるをあはれみたまひ

て、願を起したまふ本意、ひとへに惡人成佛の爲なることを自
 覺するは、是所謂彼因を建立したまへるを了知するものにし
 て眞に佛智不思議を信じたてまつるものと謂つべし、是れ破
 戒と罪根の深さを問はずと宣ふ所以なり、此の如き大悲大願
 に遇ひたてまつれば誰か廻心懺悔せざるべき、如何なる頑冥
 なる瓦礫も變して能く金と成らしむべく、如何なる凡愚も能
 く速かに功德の大寶海を滿足せしむべき也。南無阿彌陀佛。

● 故攝光院殿昨春於木屋光善寺作
 ○ 留學爾年星霜移。 再三尋跡情自悲。
 花如有意含春雨。 擁護先生頌德碑。
 ○ むかしわがまなびし窓の吳竹も
 みどりゆかしくなびきそめつゝ
 ○ うれしくも木屋の御寺に尋ね来て
 心盡しの君がもてなし
 ○ 雨ゆゑに又もひと目を木屋の寺に
 重ねゝの袖ぬらしけり

講義

「教行信證」信卷三信釋

(夏季求道會講話)

近角常觀

第八席

信樂釋(厭離穢土欣求淨土)

只今は、朝夕信仰談とは申しながら、大聲を發し、まことに慚愧に堪えぬのであります。(コノ前ニ信仰ノコトニツキ厳シク人ヲ誡ムルコトアリ) つきては之を御縁に、今の處を是非皆様に、充分聞いて頂き度いと思ふこととあります。既に前々々席に於て済ませし處であり、申さぬ積りて居つたのでありますけれども、今のお話が有りたから、之を機會にお話するのであります。第五席に於て申した「至心釋」の處の光明寺和尚の御言葉の中に、

「又眞實に二種あり一には自利眞實、二には利他眞實なり」茲を五席では、ごくざつと申したのであります。而して此の中自利眞實に就ては、此三信釋では略されてあるのではありませんけれども、今席は此の味ひにつきお話し度いと思ふのであります。既に申せし如く、親鸞聖人は、利他眞實は佛が我

々不眞實の者を、飽く迄お見捨て無き眞實が利他眞實である。又自利眞實は自力の眞實であると、おとりなされたのであります。而して其の自力の眞實とは如何となりて、聖人は「愚禿鈔」の中に之を二つに分け、自利眞實に二種あるとて、次の如くお示しなされてあるのであります。

自利眞實に就て復二種有り

- 一には、厭離眞實
- 二には、忻求眞實

厭離眞實とは、此の世は當てにならぬ、苦の世界であると、此の世を厭ひ捨つるのが厭離眞實である。又欣求眞實は、淨土を忻求して、淨土に往生仕度いと、願ひ求むるのであります。て斯く自利眞實といふ中に、厭離穢土、欣求淨土の二種有りてうち、此の世を厭離することを先きとして佛道を求むる厭離眞實は、聖道門の自力である。又淨土は樂しき處と聞きて淨土を欣求する念を先きとして、佛道を求むる欣求眞實は、淨土門中の自力である。二者共に、此の世を厭離する、若しくは淨土を欣求する念を先きとして、佛道を求むるのであれば、共に自力であるとの仰せなのであります。

二

其處で只今のお話しに引き續き、信仰上の話故遠慮無く申します。全體今日信仰を求めらるゝ新らしき青年諸君は青年諸君、又從來よりの御同行は御同行で、其の求めるのが何うなつて居るかと言ひますに、皆な求めるといふことが先きになつて居るのである。而して其の求めるが何うなつて居るかと言ふに、普通御同行達の求めらるゝ順序は、幼より説教に於過ぎ無いのである。之では何時迄やりても、夜の明けるとは無いのであります。成る程御同行の方にすれば、此の世は何時死ぬかも知れぬ、死ぬと思ふと未來が恐ろしいと言ふのも、夫れは死ぬ時の事を考えて、自分の頭でさう問題をこしらへ、然らうして苦に仕て居るといふ丈けの事にて、現在今自分が實際問題に行き詰つて苦しんで居るといふのでは無い。又青年の方にすれば、第一人格を高め正義を實行する、といふ事を先きにして、夫れて我が身は悪しき徒ら者と頭が下る自覚を生ずるといふ等が無い。何故なれば頭が下れば、人格の養成、正義の實行などいふ希望は自分に於ては駄目になつて仕舞ふのであるから、之では眞實お慈悲を求めるといふ居らぬのであります。又御同行者の中には、今日の青年などは煩悶の解決などいふ事をいふも、佛のお慈悲は極樂往生といふ後生の一大事の問題であるといふことを言はれる。成る程之は私も然らう思ふ。けれども蓮如上人も「御一代聞書」の中には、

極樂はたのしむと聞て、參らんと願ひのぞむ人は、佛にならず、彌陀をたのむ人は、佛になると仰せられ候。

とあつて「極樂は樂しい處である、地獄はおそろしい處である」と考えて、夫て極樂に參らんならんと願ひ求むるのでは、眞實の信仰は頂けぬのである。併しそれも今死ぬると差し迫つて居るならば、頂き易いのでありますけれども、之も其時直ぐ頂けるならよきも、「夫れだから頂かんならん」となるのと、容易に頂かれぬのである。て要するに、厭離穢土と此世の厭ふ可きこと先き立て、又欣求淨土と、信仰を得て後到れる結

て、此の人生は無常の處であると聽かされ、此の苦の世の厭ふ可き聞き知り、死ぬると地獄に墮つ可き淺間しき身の上なることを知らされ、此の苦の世に早く安心して、未來極樂往生出来るやうにと、強ち説く方で此の順序で説くでは無けれども、自然然らういふ風になり、從て御同行の方に於ても、「此の苦の娑婆は當てにならぬ」と思ひ込み「夫れだから早く信仰を得なければならぬ、聽聞仕なければならぬ」と求める、といふ風になつて居るのである。之が普通御同行方の求めらるゝ道行きとなつて居るのであります。之は今も言ふ如く、説く方で必ずしも然らう説くのでは無けれども、聞く方で自然然らうなつて来るのである。夫れはなる筈である。何故なれば他力が眞に頂ける迄は何人も皆な自力故、自力の心で聞くから、聞く者の方で然らうなつて来るのである。又青年諸君が道を求めらるゝ順序にすれば、夫れ々々あることなれども、此の學舎に來て下さる多くの方は、理想的なる、信仰だとか、正義だとかいふやうのことを好まれる方にて、つまり理想的に信仰を求めようと仕て居らるゝのである。て其の目的は、「信仰が無くては人格の中心が立たぬ。信仰が無ければ、社會に在りて活動が出来ぬ。故に信仰を得て之等の事の實行が出来るやうにならなければならぬ。」又「道德の實行問題にしても、信仰が無ければ眞に眞面目に道德を實行する事が出来ぬ」と、先づ高い處に自分の理想を置いて、其の理想の下に信仰を求めやうと仕て居らるゝのである。之れが一般青年諸君の求道の道行きであります。處で之では兩方とも未だ眞實の人生問題とはなつて居らぬのである。言はゞ壘の上の水練に

果の活動とか、人格とかいふ事を先きになると、頂かれぬのである。我々は腹がへつてから、物が喰べられるのである。然るに腹のふくれることを先き豫想してかゝつては、喰べられぬのである。我々は今通れる道が無いから助けを求むるのである。然るに助からぬ前から、助かることや、偉らくなる事を先きにするから、得られぬのである。殊に私は自分の方より求めたといふよりも、實際問題に突き當り、苦しんで氣づかせて貰ふた事故、實際に苦しんで居らるゝ方には、よければ察しが届き易いのであります。或る豫想を先き立て、求めて居らるゝ人には、何うも私の話は充分届き兼ねるやうである。併し其の豫想を先き立て、求めて居らるゝ人でも、夫れで信仰が得られぬから、得られぬといふ處が苦しみになつてある。未來が恐ろしいと言はるゝ人でも、未來が恐ろしいよりも夫れだから信心を得にやならぬ、が其の信心が得られぬといふ苦しみが確かに實際問題となつてあるのである。

三

そこで少しく前に戻つて申しますに、親鸞聖人が斯く厭離穢土、忻求淨土を自力と仰せられたは、如何にもひどいやうであるけれども、之が實に法然聖人からあるのであります。即ち當講話開始以來度々繰り返す、法然聖人が『選擇集』に於て、發菩提心迄が自力であるとして、捨てゝお仕舞ひなされたといふが之である。度々申す如く、法然聖人親鸞聖人は此の爲めに流罪にお遇ひ下されたのであります。先日此の事を話したら、或方は初つごとを聞いたとして、非常に喜び禮を述

てる自利眞實では、駄目であるとお知らせされたのである。處が今他方の利他眞實とは何うかといふに、此方は不實ばかりの奴なのである。此の一點まこと無き不眞實の奴が哀れてあると、佛の方より哀れんで下さるが、佛の利他眞實である。故に之には一點此方からといふ事は無い、此方は唯向ふからの廣大なる御親切を受けるばかりなのであります。此方は信心を得度い、極樂に参り度いといふ殊勝な思ひがあると、思ふて居るのであるけれども、實は然らう思つて居るのが間違ひにて、そんな心は微塵も無く、飽く迄不淨不眞實ばかり、助かる道とは一筋も無い居無の我々なのである。佛の方より助け下さる手懸りすらも、此の我々の心の上には一點無い居ぬ。何處迄も虚假不實だらけの此方である。安心を求め、信仰を求めるといふのも、社會に在りて活動を爲し、自分が立派にやり度い爲めに求めるなれば、是れ佛を自分の便利に利用せんと仕て居るのである。又未來自己の安樂を求め極樂に生れ度い爲め、信心を頂き度いといふは、是れ自分の利欲安樂の道具に佛のお慈悲を用ゐようといふのである。畢竟親が自分の爲め苦心して遣して置いて下された財産を、これがあるから皆んな出して自分の放蕩の資に使つて仕舞へといふのであります。されば斯くの如き心を本として、我々が信心を頂かう、お慈悲を得やうと言つて居るのは、畢竟これ此の淺間しき根性を押し進めてもつと、まい事になり度いといふのである。之では決して得らるゝ事無いのであります。さて斯くの如く淺間しき心の自分にて、三界に誰一人振り反つて見て呉れる者も無い身の上とすれば、最早や實際自

べてお歸り下された。即ち阿彌陀佛が法藏比丘の昔、衆生往生の行をお選ひ下された時、有らゆる行を皆な選ひ捨て、最後に發菩提心迄が、之が有つては衆生が助からぬとて之れ迄選ひ捨て唯南無阿彌陀佛の一行を攝取して下されたといふ事である。之が何か、我々の方より往生仕度い、信心頂き度いと稱ふる南無阿彌陀佛ならば、之れ菩提心のついてある南無阿彌陀佛である。之では我々助かることが無いのであります。處が今阿彌陀佛の選擇本願の南無阿彌陀佛は、茲が今言ふ如く純粹の南無阿彌陀佛である。初めより發菩提心の準備のついて居ぬ南無阿彌陀佛である。此方より信仰を得度い、淨土に生れ度いなどいふ思ひの、取り除かれたる一向專修の念佛である。親鸞聖人が厭離穢土、欣求淨土は自力であると言はれたは、之をお知らせ下されたのであります。

四

そこで人生問題の上より申すに、第三席に於て申した如く、私が苦しみて仕て見やう無つた時に、誰か此の自分の淺間しき仕て見やう無き心中を知り抜いて、之れが哀れてであると眞に同情して呉れる友人は無いかと、半年ばかり苦しんで求めた。今信仰問題で、信仰が欲しいと苦しみが之れなのであります。處が欲しいと求めることでは、決して與へられぬ。私が、自分の心を知つて呉れる同情者を欲しいと思つて居る中は、苦むばかりで、決して得られなかつた。此方より求める事では、遂に最後迄、開けなかつたのであります。夫れ故親鸞聖人は今至誠心をお示し下さるに、斯く此方より發菩提心を起し、此方より厭離穢土、欣求淨土を先き立

分は此の世の間に身の置き所も無い。死して此の苦しさが込止ものならば、死んでも仕舞はうが、死んだとて此の根性は善くならぬ。すれば何うにも斯うにも進退行き詰つて、何處に身の置き所も無いといふのが、私共今日生死流轉の有様である。而して茲の處へ向ふからの遣る瀬無き大悲の御呼び聲が来て下さるのであります。即ち善導大師二河白道の御言葉に、

我今回へらば亦死せん、住るも亦死せん、去くも亦死せん、一種として死を免れず。

此の往くにも歸るにも、進退谷まつて何うにも仕て見やう無き處に、西岸上に人有つて喚つて言はく、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、衆べて水火の難に墮せんことを畏れざれ。

と、向ふの方から呼びかけ下さるが利他眞實の御呼び聲である。茲の處を能く頂かねばならぬのであります。

五

て今申すが如くに、我々には眞實の心といふものは、卵の毛の先き程も無い。道を求めるといふのも、我々のは名譽心のくつついた道を求めるである。人の同情を求めるといふのも、人の親切を自分の利益に用ゐやうと言ふのである。爲すこと思ふ事、我々のは一切罪ならざるは無いのであります。最後の後世往生を求めるといふ事すらが、今言ふ如く名利の形を變へたに過ぎぬのである。「自分はお慈悲によつて、我が身の悪しさを知らせて貰つた」といふの迄が「夫れだから

今後善くして行かねばならぬ」といふ苦勞のついである間は、矢張り問題は今迄人相手であつたのが、信仰問題に變形したといふ迄である。も一つ言へば人生問題に苦しみて、法を求めらるゝ皆さんが、自分の心の悪しき事は到底人にも言はれぬと言はれる。其の我が心の悪しき問題を直に信仰の問題として、信仰によりて夫れ程の悪しき心を善く仕やうといふ處に、腰を掛けて居らるゝから、動かれなくなつて道が開けぬのである。これでは矢張り何處迄も自分なるものをよい子にして行かうといふのであるから、他力の救ひが頂かれる筈は無いのであります。斯く此方の心を先きにして行く、此の方の道では、到底信心は頂かれぬ。て私は常に申す事でありませんが、私が信仰に氣づかせて貰つた當座、眞實の信仰からでなければ、政治も實業も、何事をするも皆な駄目であると、大に主張した事でありませうけれども、併しそれは何うも思ふやう皆さんの心に通ほらぬ。之れは皆さんの心に信仰が無いからである。故に信仰が根源である。信仰さへあれば、皆自然に分つて來るのであるから」と、其處で求道學舎と看板を掲げ、皆様に聞きに來て頂く事にしたのであります。すると此の求道の文字である。皆さんが文字通り、道を求める／＼と出て下さる傾きが見えて來たのである。今言ふ如く、我々が此方の方から道を求めるでは決して信仰は頂かれぬ。て一時は此の求道の文字を改めなければならぬかとさへ考へた程であります。が、處が此の求道なる名前をつけた時は、『大經』の法藏菩薩の御苦勞を説き下さる處より名前を選んで置きながらも、其時は氣づかなかつたのでありますけれども、

謹て往相の回向を按ずるに、大信心有り。大信心とは則ち是れ長生不死の神方、欣淨厭穢の妙術、選擇回向の直心、(中略)眞如一實の信海也。

と仰せられてあります。即ち厭離穢土欣求淨土は慈悲を頂いた上から現はれて來る所の味ひである。然るを頂かぬ前なら、信心を頂き度いの、極樂に參り度いのといふのは、いつの間にか自分にまことある如く思ひて、自力根性に陥入つて居るものであります。

六

さて、して見れば其の佛の廣大なる淨土の大菩提心を頂くは何處であるか、問題は之れになつて來るのであります。即ち今言ふ如くに、我々には一つもまことの心無く、有るものは淺間しき根性ばかりである。而も其の淺間しき根性が有るといふ丈けにて、其儘ちつと在られるものなら、またよけれども、其の爲め流轉輪廻止む時無く、日夜に地獄にだゝ走つて居る我々である。其の我々の哀れなる迷ひの様を御覽下されて、其の爲め法藏菩薩が世自在王佛のみ前に於て、超世無上の本願をお起し下されたのであります。親鸞聖人は之を『教卷』に於て、法藏菩薩と仰しやらず、直ぐ『彌陀誓ひを超發して』と示し下されてある。即ち法藏菩薩は、久遠の阿彌陀佛が私を助ける爲めに、態々現はれ下されし御姿に外ならぬのであります。で斯く阿彌陀佛世自在王佛の御許に法藏菩薩と現はれ、我々十方の衆生が斯くの如く、罪業に惱んで居る。之を如何にせんかと御覽下された時、廣大なる大菩提心を起して有らぬ道を求め、行を修し、何うかして其の者を助

此の求道は實に法藏菩薩の求道であつたのである。斯く我々自分の方より、道を求めなければならぬ／＼と何程もがいても夫れでは駄目であるに、斯く法藏菩薩が其の我々の爲めに、自ら道を求めて下されたのであるから、有難いのであります。猶ほ段々頂かせて貰うて見るに、法然聖人が發菩提心は駄目であると言せられたを、親鸞聖人は自力の發菩提心は捨てるが、淨土の大菩提心があることを示し下されてあるのである。之は何かといふに、信心が淨土の大菩提心であるからである。此の淨土の大菩提心は、我々が此方の方から頂かうと求めて頂くのでは無い、上、菩提を求めるとは、佛が此の仕て見やう無き私を哀れんで下さる佛の御心を頂くが、淨土の大菩提心であつたのである。『和讃』の中には、

淨土の大菩提心は、願作佛心をすゝめしむ、すなはち願作佛心を、度衆生心となづけたり。

といふ御言葉もありません。で斯く我々が佛の廣大なる御心を、有難うと頂く、之が淨土の大菩提心である。斯く我々、信仰前には菩提心も何も無けれども、信仰の上からは、淨土の大菩提心が現はれて來るのである。又厭離穢土欣求淨土の心も、信仰頂く迄は我々初めより有ること無けれども、信心頂きた時には夫れが信仰の上より現はれて來るとなるのであります。即ち昨日迄自分の一身に思ふやうにならぬ／＼と苦しみて居た者が、お慈悲を頂き「あゝ今迄はつゝまらぬ心配をして居た」となる時は、今迄苦に仕て居た此の世が捨てられ、お慈悲一つが有難いと欣ばせて貰ふようになるのである。夫れ故聖人は此の度びは『信卷』の初めに於て、

けて遣り度い／＼との、五劫思惟のあなた念力より廣大なる本願が起り、斯くの如き罪業の私を思召す遣る瀬無き御心より永劫の御苦勞が現はれ、其の結果が今日大悲の親機が、向ふから私の淺間しき胸中を知り援かせられ、其の汝の爲めに現在親が斯く汝を待ち兼ねて居るぞと、現に私に知らせ下さる此の利他眞實の御呼び聲である。て此の廣大の親心に遇はせて頂く迄は、我々には善いも悪いも無いのである。有れば有るものは、悪しき根性ばかりなのであります。常に言ふ如く、我々の心に在るものは人を疑ひ隔てる心ばかり、其の爲めに我々は日夜悩み苦しんで居るのである。て若し佛此の者を御覽下されて「それはいかぬ」と仰せらるゝのなら、我々助かりやうは無ないのであるけれども、佛は此の者を、「其の悪しき根性の止まぬ夫れが可哀相で見居られぬのである」と。も一つ言へば、先きよりいふ自分の方より道を求める心を止めやうたつて、夫れが止められぬ我々である。て聖人は此の自力根性を邪と示し下された。自力他力を對に示し下さる處になると、之を邪と言はれてあるのである。即ちいくら止めやうと思つても、止められぬ處が我々の根性の邪である。て此の者を佛御覽あつて、「汝の道は間違つて居るから止めよ」と言つて下さるのみでは、我々は止まらぬのである。即ち先達つて來あれ程厳しく、言ひ過ぎると思ふ程言つても、殊勝病に罹つて居る人が自分の殊勝振つて居ることに氣がつかぬ。何處迄も自分の間違つた自力根性にかゝはつて居るから、氣がつかぬのである。斯く間違つて居るから止めよと言はれても止められず、放なせと言はれても放

されぬ我々であるが、其の淺間しき根性を持ち、其の自力の計ひに係はつて、人を疑ひ隔て、居る私を、他方の親様は御覽下されて、「如何にも淺間しく罪深き其の方であるが、我は汝の其の罪深く仕て見やう無き所が可哀相で、其の爲め汝が見捨てられぬのである。如何にも然ういふ惡しき心が起るて有らう、無理も無い、如何にも色々苦しんでも分らぬであらう。」

存覺上人の『歎徳文』の中には、定水をこらすといへども識浪しきりに動き、心月を觀ずといへども妄雲なほ覆ふ。

といふ御言葉が有つて、「其の如く何程一生懸命に求め苦しんでも分らぬ、其の汝の煩惱具足の有様を、夫れが可哀相である」と憐れむが、我が大悲の親心で有るぞ。汝が得よう／＼と自分の心を先き立つる其の道では、何程求めても他力の信心は頂かれぬぞ。『和讃』には、

定散諸機各別の、自力の三心ひるがへし、如來利他の信心に、通入せんとねがふべし。

得やう／＼と此方から欣求淨土を先き立てるは、自力の三心で有つて、之では信心は頂かれぬ。て我は其の惡しき仕て見やう無き自力根性の汝に在る事を知つて居る。知つたればこそ夫れが可哀相で堪えられぬ故、其の者を何うかして／＼と思ふ思ひの積り／＼で、今斯く阿彌陀佛と現はれ、一刻の猶豫も無く汝を、救ふといふ慈悲であるぞ」と、恰も溢るゝ流れが僅かなる隙を見つけて、堤を決し、遁れ去らうとする如く、我々は自分の淺間しき根性から、計らひ心の堤防を作り、慈悲の水にかゝらぬやう、我と我が手て支えて居るのであ

うと、隙を見ては斯く常に私の方に言ひ詰めになし、又一切の諸佛は常に廣長の舌相を出して、之を言ひさかせて下されるのである、『阿彌陀經』に

汝等衆生、當に是の不可思議功德を稱讚する一切諸佛に護念せらるゝの經を信ずべし

七

とある諸佛の稱讚は、之れに外ならぬのであります。

さて是れ程迄に佛の方よりは言つて下されてあるに、此方はけろりとして之を受けることをせぬ。却つて此方より註文を出し、「斯くして居る中に、佛の慈悲は來て下されさうなものだ」と言つて居るのである。親様の方は齒痒くて仕やうが無い。足ずりして、「此れ位迄言ふに、少しは我慢の根性を離れて、親の言ふ事を聞いて呉れ」と言はるゝのであります。すると又茲て我々は、「親様の方は然ういふ風にやるせなく言つて下さるのだな」といふ風になり易いのである。斯くなる時は、親様と自分の間に襖一重の隔りが出來て來る。襖を隔て、聞いて居るのは何もならぬのであります。能く慈悲の例に言はるゝ話に、越中の善六なる男が、親に夏、「田に水を入れよ」と言はれて、よい顔を仕無つた。今度は「汝何故行かぬか」と言はれて、俄に不足さうなる顔を爲し、急に家を飛び出して、反對の方角なる堤の方に飛んで行く様子である。そこで親も心配して、何處に行くのかと跡追うて飛んで行くに、計らんや河にはまつて死のうとする様子である。そこで親はびつくりして、小供の側にとんで行き、袖を捕へて「まあ待て」ととめるけれども、小供は親にあてつけてあるか

るが、佛は其の私の剛慢の堤を、「それがあつたのが彌々不便で見て居られぬのである」と、向ふの方より僅かなる隙を求めて其の堤を打ち碎ぎ、「何うにでもして其の者に此の我が親心を届けねば措かぬ」と、如來無限の慈悲が其の僅かなる隙間より、此の私の心の中に入り満ちて下さる廣大の御哀れみなのであります。て前席に申した『信樂釋』の處の初めのお言葉には、

信樂と言ふは、則ち是れ如來の満足大悲圓融無碍の信心海なり。云々。

夫れ故、我々が信心頂くといふは、我々の方より頂かうと手を出して頂くので無い、佛の方より是れ程迄にやるせなく思召す、此の佛の眞實を聞かせて貰つてみれば、此方が難有うと頂かすには居られぬやうになるのである。私のやうな話の方をすれば、ひどく煩悶したり、又病氣にてもなれば信仰が得られやうなど思ひ易いのでありますけれども、此方が苦しんで信仰が得らるゝので無い。向ふ様からの是れ程迄の御親切で、此方が貰はずには居られぬやうになるのである、それも貰はう／＼と思つて貰ふので無い。佛の方より「遣らう／＼」との御親切が私の身に迫り、「是れ程迄に親を心配させ、泣かせて置きながら、まだ／＼頂けぬ、頂けるなどは、何たる了見であるか」と迄言つて下さる、遣る瀬無き向ふの御眞實に打明かされて、此方が頂か無くてはならぬやうになるのである。之が大悲の御催うして、宿善開發するものであります。故に宿善開發は、頂ける迄待ち居れとのことでは無い。佛の方では一刻も早く此の慈悲を届けやう、手懸りをつけよ

ら容易に止まらうとせぬ、親が攫まへて止めれば止める程死ぬる／＼と振り放し益々水に飛び込まうとする。遂に仕舞ひには親の方が力盡き、親の方から頭を下げ、「あゝ自分の方が言ひ過ぎてあつた。自分の方が悪かつた。何うか許して、此の儘家に歸つて呉れ」と、親の方から手をつかれて、初めて息子が歸つて行つたといふ話であります。即ち佛の慈悲は、此の如く此方は佛を振り放して退けて行く者を、佛の方から言葉で穩かにし、引き戻して下さる廣大の御哀れみであるといふのである。之は此の間談話會の席にて、或る方が喜ばれた一休上人の歌にも

極樂にさのみ用事はなけれども彌陀を助けにゆかざるまい。

之を承はつて私も非常に有難かつたのでありますけれども、併し唯之れだけ有るのでは、私は何うも物足りぬ。茲にも一言付け加へねばならぬ事があるのであります。夫れは、成る程親の方よりは斯の如く遣る瀬無く言つて下さる廣大の慈悲にて、誠に有難いのであるけれども、併し親の方より斯く言つて下さるのにて、此方が不精無性に歸つて行つた、といふ丈けにては、まだ眞に親の夫れ程迄の御心勞が頂けたものでは無いのである。然うては無く、親が「汝水に入るなら我も共に水に入る」と迄言うて下さる此の親の一言を聞いた時、今迄は知らなんだが、親は夫れ程迄此の自分を思召して下さる廣大の御親切で有つたか。それで茲迄自分を助ける爲めに、態々跡追うて來て下されたのであつたか、實に申譯無い」と、今迄飛び込まふと仕て居た小供が、其の親のやる

せなき言葉の下に「實に相濟まぬ」と頭が下つた一念に、初めて親の言葉のまに／＼あとについて歸る事が出来るのである。之れが一念の信なのであります。『和讃』には

若不生者のちかひゆゑ、 信樂まことにときいたり
一念慶喜するひとは、 往生かならずさだまりぬ。

汝が何うしても水に入るといふなら、我も正覺の位は取らぬ、我れが正覺の位を捨て、佛にならぬか。汝の方が助かるか、さあ何れであるか」と、正覺の位を賭け物になされ、引きとめて下さる大悲の御心を聞く時は、「親が夫れ程に言はれるから歸らう」と、愚圖々々あとについて歸るのでは無い。法然聖人がお喜びなされた

説ひ我佛を得んに、十方の衆生我が名號を稱へて、下十聲
至らん、若し生れずば正覺を取らず。彼の佛今現在に成佛
したまへり、本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往
生を得。

の御文の通り、「あゝ有難や南無阿彌陀佛々々」と、其の遣る瀬無き親の御親切が胸に徹して、其の思召しの程に感泣して、今迄親に背いて居た足を向け直して、あやまり／＼親の許に歸るとなるのである。茲を私は力を入れて言ひ度いのであります。若し茲で親の夫程の心が貫へず、「親が夫れ程に言はれるから歸らう」とは、又都合によると、河へ出かけやうとなるのである。然るに佛は、「汝を其の儘水に入れる位ならば、我は何しに佛にならうや。既に正覺を成就し、佛と成りたる上は、一刻も汝を捨て置かぬ慈悲であるぞ」と、此の遣る瀬無い御親切を承れば、「若不生者の誓ひゆゑ、信樂ま

て私は常に言ふのであります。うつかりするとお慈悲の話が、本願や名號といふ事の説明になつていかぬのである。本願、名號といふたとて、本願、名號といふ物が別に有る譯で無い。本願とて何も四角や三角の物柄で有りはせぬのである。本願とは、此の仕て見やう無き奴が可哀相で、飽く迄其の者を救はねば措かぬと思召し下さるこの親の御心の外に何もあらせぬのである。別に第十八願なるものがあると云ふたら、間違ひなのであります。又南無阿彌陀佛の六字の謂はれを聞きひらくとは、何か異つた希らしき味ひを感じ得ること、私も長く思うて居た。處が蓮如上人が仰せらるゝ南無阿彌陀佛の謂はれとは、今云ふ遣る瀬なき親心が、直ぐに南無阿彌陀佛の謂はれてあつたのである。南無阿彌陀佛とは、親が斯くの如く我々の爲めに御苦勞下されて、我々が有難や南無阿彌陀佛と一念歸命する時、佛は「あゝ聞いて呉れたか満足なるぞ」と、其の者を光明中に攝取して下さるが阿彌陀佛と、唯これ丈の事なのである。即ち蓮如上人『御文』の仰せは、佛が遣る瀬無く私に向うて下さる佛の心儘をお知らせ下されたに外ならぬのであります。猶ほ申せば斯く我々に臨んで下さる佛のお姿が、無論満足大悲のお姿がましますに違はぬも、其の御姿が何も冥想的に外界に求めて拜するのでは無い。斯く罪深き奴が見捨てられぬと、遣る瀬無き廣大のお心一つより現はれ下されしが、佛の御姿にて、其の廣大のお心の儘が、即ちあなたの御姿にてましますのである。又極樂の莊嚴、七寶樹林の一々の木の葉迄が、此の私を可哀い／＼との御心の外に意味はあらせぬのである。總て親のこさ

ことに時いたりて、「あゝ夫れ程迄に此の親捨ての私を、思召し下さる廣大のお心であつたか、今迄長い間、實に私が悪しくムりました、申譯が有りませぬ」と、今迄此方は長き間親から遣げやう、反對の方角に行かう、と仕て居たのである。全體我々が今迄道を求める／＼と、佛の方角に向つて居ると思つて居たのが間違ひにて、實は親と反對の方角に走つて居るのである。ぢやによりて、親は其の者を引つ摺まへ、「何うか此の我が親心を聞いて呉れ、頂いて呉れ」と、遣る瀬無く思召して下さる此のあなたの親心が、若不生者の御誓ひ、之が阿彌陀佛のお慈悲なのである。至心信樂欲生の三信といふも、至心は此の佛の遣る瀬無き御眞實、其の眞實は是れ程迄に思つて下さる信樂の慈悲、其の慈悲は極樂に生れんと欲へ、と呼びて下さる此の遣る瀬無き仰せなのである。故に次ぎからお話する欲生釋の初めに於ては

欲生と言ふは、即ち如來諸有の群生を招喚したまふの救命なり。

とある。而して此の「待つて居るから早く來よ」との仰せが、形に現はれて南無阿彌陀佛の六字である。斯く親が遣る瀬無き思召し一つより、我々が淺間しき様を御覽下され、其の者を助けよう／＼と廣大の本願を起し、長々御苦勞御心配下されて御待兼ね下さるといふが、即ち本願の生起本末である。して其の長々の御念力にて、遂に其の廣大の思召しが私の心に届いて下され、斯く「長々申譯無つた」と此方が折れて佛に向つた一念が信心となるのであります。

八

えて下された金銀財寶は、何もかも小供が可哀い／＼との親心の外無いのである。故に南無阿彌陀佛を頂くといい、本願の生起本末を聞くと云ひ、信心を頂くと云ふも、何も外に事があるのでは無い。此の遣る瀬無きお心の有り丈けが、佛の御姿、名號、本願。此の御心をさかせて貰つた處が聞其名號、本願の生起本末を聞かせて頂いたもの、となるのであります。

九

そこで前席で言ひ残した『涅槃經』御文には、
又言、信復有二種。一從聞生、二從思生。是人信心從聞而生不從思生是故名爲信不具足。復有二種。一信有道二信得者。是人信心唯信有道都無信有得道之人是名爲信不具足。
今言ふ如く、本願の生起本末を聞くと云ふは、唯大やうに耳で聞くので無い、本願の生起本末が明に私の心に届いて下された處が、眞實の信心である。故に茲の御言葉には
『信に復二種有り、一には聞より生ず、二には思より生ず。是の人の信心は聞よりして生じて、思より生ぜず、是の故に名けて信不具足と爲す』
と。即ち南無阿彌陀佛の御謂はれを、唯斯くの如き法門として耳に聞いて喜んで居る丈けでは、本當の信心で無い。それでは信猶ほ不具足である。其の廣大の御哀みを眞に心に頂き、其のお慈悲で中心から夜を明けさせて貰うた處で、眞實の信心となるのであります。又
『復二種あり、一には道有りと言はず、二には得者を信ず。是

の人の信心は唯道有りとして、都べて得道の人有りとして信ぜず、是を名けて信不具足と爲すと。』
之は他力の御教へは、此の仕て見やう無き私を、見捨て給はざる親様の廣大の御思召一つであつて、他に慈悲の道なるものが存するので無い。夫れ故唯道の頼無き慈悲の道が有る」と喜んで居る丈けて、肝腎の得道の大悲の親様の御親切が頂けぬ事に於ては、其の人はまだ信不具足である。其の廣大の親様の御親切が頂けた處が、本當の信であるとの御示してあります。猶ほ此の前に言ふを忘れたのでありますが、も一つ『涅槃經』の御文がある。夫れは

又言、或説阿耨多羅三藐三菩提信心爲因、是菩提因雖無量若説信心則已攝盡。

之は阿耨多羅三藐三菩提を得させて頂くは、此の遣る頼無き大悲の有難やと頂く信心が因である。阿耨多羅三藐三菩提の因、實に無量であつて、様々あるけれども、此の信心頂けば、有りとする萬徳、皆な此の信心に具はる故、信心一つを説けば菩提の因皆な此中に攝盡さるとであります。

一〇

さて今席は何やら妙な席になり、殊に先き程は、い、角立てた事を申し、周囲にお聴き下された方は定めて難有く御聞き取り下された事と思ひますも、御當人には誠に申譯なき次第であります。斯く甚だ無遠慮な事と申し、嘸や氣持の悪しかつた事と思ひますも、何うか目の着け處を顧し、眞實の御哀れみを頂きて欲しい、と思ふ事であります。今日は

らく此の法話會には出席仕無つたのであります。之は何故かといふに、當初此の會に出よとの御話の有つた時、私は「よ、加減な聞きやうをさるる、處へは、いやである。聞くなら眞劍に聞いて貰へる處で無くては」と申して愚圖つき、つい夫れなりになつて中絶えて居つたのである。是れ私の今の狹隘の性質であります。處が此の頃は四方八面、皆様が闊を開いて、皆様の方からお出で下さる。實は私の方から心を開いて出て行き度いのであるけれど、私の淺間しき性分として夫れが出来ぬ。然るに斯く近頃は諸方面とも一時に開け、皆様の方より斯く御來聴下さるやうになり、彌々申譯無つたと、懺悔させて頂く事があります。實は「本當に聞いて呉る、處で無くては信心は駄目である、一生懸命に聞くやうになる迄は出席仕無い」は甚だ宜しく無い。「あかぬから何時迄も放つて置け」との佛のお慈悲で無いのである。其のあかぬ者を何處迄も言うて、言ひ聞かせ、遁る者を引き捕へて、何うしても其の者に此の眞實を届けねば措かぬとある廣大の親様である。此の點より言ふ時は、自分の關係ある學生諸君をはじめ、宗派、宗教界の人々に對し、有縁無縁を問はず、是非此の廣大の思召を充分聞いて頂かねば、相濟まぬと思ふ事があります。然るに第一、求道學舎と看板を掲げ、「道を求め度い者は進んで茲へやつて來い」との態度が甚だ宜しく無い。こは以前餘りに遣り過ぎた結果、斯くなつたのでありますけれども、甚だ申譯無き事と懺悔させて頂く次第であります。去りながら、不思議なる哉私は、一旦御縁の有つた方は、設ひ何のやうな事をせられても、一人として其人が捨てられぬ。設ひ其の爲め

懺悔の序に申すのであります。全體私は常に皆さんから狹隘々々と言はれる。「何うも近角の處に行くと、近角は狹隘で、一分一厘近角の欲する通りにせなければ氣に入らぬと人から言はれる。之は實に慚愧の至りて、私本來の我慢の性格が手傳つて居るものと、懺悔させて頂く事があります。去りながら私は、本來斯る性質では無つた。本來は非常に遠慮深い性質で、決して人に言ひ過ぎなど出来無つた。寧ろ當然言ふ可き正しき主張さへ、人に向つて口に出ぬといふ方の性質であつたのであります。處が此のお慈悲を頂いてからは、何ても此のお慈悲一つを」といふ考へになつてからは、平日の言動のみならず、社會上宗教上の實際問題に對して迄も、皆な此の無遠慮が出て來るのである。こは甚だ勿體無き事でありませけれども、専修專念、此お慈悲ばかりで無くてはと思ふ處から、つい斯くなつて參るのであります。て若しや初めて御目に懸つた方で有らうとも、常にお目に懸つて居る方には無論の事、此のお慈悲一つをお聞き下さらうといふ方に對しては、一見僞知の如く、充分の敬意を拂つて、思ふさま有難く話させて頂いて居る事である。こは私個人としては、斯くの如く狹隘なるは、甚だ相濟まぬ事であり、又不利益でもあるのでありますけれども、設ひ如何に不利益で有らうが、私自身が已前長くよ、加減な事と遣りぞこなつて居つた事故、是非之ばかりは何うあつても充分に御傳へ仕度いとなるのであります。

猶ほ序に大に懺悔させて頂く事があります。今度の會には淺草婦人法話會の方が澤山お出で下さるのであるが、私は長

に自分がどのやうな厄介、不利益を受けやうとも、何うしても其人が離されぬ。勿論其の間に人間の貪慾瞋慧愚痴の念は有るのでありますも、其の間から何うしも其人が捨てられぬ。之は皆様も必ずかうあるだらうと思ふのであります。之が皆な遣る頼無き大悲の親様が、先きもあとも御存知の上にて、御導き下さるものにて、殊に私如き我慢な奴は、今言ふ漸次諸方面に御縁が熟し來る迄、何うしても此方の頭が下らぬ。處が斯く諸方面に御縁が現はれ來るにて、「あ、自分は冷淡なる奴であつた」と今更淺間しく懺悔させて貰ふ事があります。併し乍ら、親鸞聖人の『教行信證』に於て、最も有難きは、眞假辨別といふ處に、最も力を御注ぎ下されてある事である。其のやうな具合に、手廣くといふよりも、一人にても眞實の處を頂きてほしいと思ふ處から、つい言葉が我慢になつて參り、甚だ申譯無き事があります。(夏季求道會第五日第二序)



告白

入信の葉

吉田藤吉

○悪しきをやめよ善をなせ

とは聖人方の私共に對する教訓である、

御尤とは思へども實際それが出来ぬから困る。

○出来ぬでもよい

とは外道の聲、

一寸らくな様にも思へるがこれではやつぱり本心がすまぬ。

世の中に澤山な教へはあれど約めて見れば、以上の二つにをさまると思ふ、その何れの道にても安心の出来ぬのが私共の實際である、この私共の實際を透見したまひて、之を救はんがために御説き下されたのが佛教の眞髓である、その眞髓を私共に遺憾なく御届け下さるのが實に我が親鸞聖人の御教化である。

斯くも極善最上の眞宗の御教が、今日に於ては随分混亂してある様で、いたまじき限りである、この誤謬を一々指摘して正さんなどは、到底微力の及ぶところにあらねど、せめて余の信仰の立場より氣付てをる要點丈にても記して、聊か世

の求道者の資料に供したいと思ふ。今日一般に傳へられてをる他力眞宗の御教化が、どうも先きに記した二つの範圍を脱してをらぬ様に思へる、よく一般に説かる、「このまゝながらの御助け」とか、「唯の唯の御助け」とか、又「無條件の救済」とか云へる言葉が、以上第二の「悪しくてもよい」と云ふ意味に解せられてはあるまいか、「さて信の上から王法仁義をまもらねばならぬ」、「何々をせねばならぬ」と云へる説き方は、以上第一の「悪しきを止めよ善をなせ」の意味に解せられてはあるまいか、若し果して然りとせんか、今日世間で申す眞宗の眞俗二諦と云ふ意味は、以上二つをつぎ合せた様な説き方ではあるまいか、どうも自分にはさう云ふふう聞こえる。

お助けの方は、そのまゝなりて唯の唯、その代りに俗諦の方はなるべくよくやつてゆかねばならぬ。

とは、恰も一方で許して、片方で抑へる様な氣味がする、若し假りに私の想像が的中をるとすれば、これは非常なる間違にて、説く人も聞く人も、目を醒まさねばならぬ。多年信仰に志す人の不審に、

御助の方は疑ひなければ、どうも俗諦の方が守れぬのて困ります。

とは、まさに一方は許されて片方で抑へられてをる有様ではあるまいか。

俗諦はなるほどまもれぬ、守れぬけれども、このまゝなりて御助けと頂かせてもらふて安心をいたしてをります。

は抑へられる方に向ひて苦しんでをる有様、後者は許された方に向ひて樂になつてをる有様、二者全く別の様に見ゆれども、實は同じ心の状態が時によつて現はれ方の相違ある迄である。前者苦しんでをると申すもの、心のどこにか御助丈は間違はぬからと、救けてをる、後者樂な様なれども心のどこにか「困る」と云ふ分子がかくれてをる、この兩者を往きつ復りつしてをる有様が、世に云ふ信心が頂けたとか、くづれたとか申すのではなまるまいか、斯かる聲は随分多く信仰界に於て耳にすることである、以上はさきに申した私の想像なるものも、まんだらつてをらぬこともあるまい。

かゝる心理状態は、あながちに宗教に志してをるもの計りではない、全く宗教とか、信仰とか、口にせざる世上一般の人にして、時には道義心かられて、善くやらねばならぬと奮ひ、出来ぬとかこち、時にはどうせ人並だからと投げやつて樂な様な氣もちになり、彼此を反復してやまぬのである。果して然らば信仰に志してをる人もをらぬ人も、同様に未安心の状態と申さねばならぬ、こゝに於て信仰に志してをる人も志してをらざる人も、はた説く人も聞く人も、反省一番大に覺悟をいたさねばならぬ。それはなぜかと申せば、前に申した通り悪をやめよは聖人の教、悪るふてもよいとは外道の聲、この二つを一所にしたところが、絶対に眞の光が現はれて來よう筈がない、末法濁世の我等、眞の光即佛陀の御聲に接せずしてどうして萬劫たつとも救はるべき。しからば、眞の佛の教は如何と申すに、今それをば頂き奉る前に、尙少しく以上の教へにて安心の出来ぬすぢあひを申して置かねばな

らぬ、俗諦の方は善くやつてゆけ」なるほど善くやつてゆきたいは山々なれど、また善くやらんと心にかけたる事も年久しいけれど、如何せんまたしても愚痴が起り腹がたつ、時にこちらは出来る丈の道を守つて見るけれど、向ふがそれに對して飽迄不道理を以てする、たとへ向ふが如何に不道理を以てするとも、こちらはどこ／＼迄も好意を以て對するが眞の道たることは知らざるにあらねども、それは事實上出来ぬ、かくの如く吾人は人間相互善惡の思想に係はつて奮戦苦闘すること茲に多年、今は實に刀折れ箭つきたる有様である。この疲れきつたる私に向て、なほ善くせよとは、やせ馬に鞭をあてる様なものではあるまいか、ぢやと申してそのまゝでよいと申されたところが、これでよい位なら何もはじめから苦しみはせぬ、よいと言はれたところが、「そちらはよいか知らぬがこちらは困る」と申したいのが、我等の偽りなき性情ではあるまいか、かくの如く善くせよと言はれて善く出来ぬ、悪しくてもよいと言はれても氣ずみかせぬ、私共は如何にして救はるべきか、否現に私は如何にして救はれたるか、こゝは理窟の問題でなくて、實際の問題である。親鸞聖人の御化導下さる他力眞宗の御教は、この實際の苦境を實際に救ふて下さる、絶対不二の福音である。宗教の眼目は唯この一點にあるのである。其の一點とは現在この私に向て………尙念のため現在の私なるものを明かにして置かねばならぬ。

○ながい間悪しきをやまぬ／＼と苦しんでをるこの私。

○換言すれば信心が頂けぬ／＼と惱んでをるこの私。

○時にはやまぬなりてよいのぢやと云ふ様な心もちになる

この私。

○又御信心は頂けぬけれども御助一つは間違ない、この間違ないと言ふことの承知の出来たのが即信心ぢや、などととんでもない事を申してをるこの私。

○口では御信心とか、ありがたいとか申して居ながら、腹のそこには時々如來なんて實際存在するからなんどと思ひながらも、今更斯様な事を口にするわけにはゆかぬと、一人ておもひ煩ふてをるこの私。

○この外言ふに言はれぬ無量のおもひになやまされ、あかすにあかされぬ實際の立場に困てをるこの私。

かくの如きの私に向つて一人の人現はれ來りて申さるゝには、そは悪しきをやめよと言ふにもあらず、悪しくてもよいと言ふにもあらず。

○悪しきのが可哀想であるの唯一言

嗚呼この一言これが現に私が多年の苦惱より救はれたる聲である、生れてはじめて耳にしたる言葉である、この聲この言葉は今少しく具さに申して見れば、

なるほど汝は悪しさが止まぬて困つて居る、如何にも尤もな事である、それをやめ得たら心が樂であらうと想像いたして今日迄修養の道にも志してをる、汝の考へとしては如何にも無理ないことである、しかしそれは皆出来ぬこと、その出来ぬことをしようゝとして苦しんでをるのは、これに年久しき事である、かく申せば汝はすぐに早合點をいたして、やまぬてもよいのぢや、このなりて御助一つは間違はぬとか、思ひさだめてどうしても我の心理解してくれぬ

何もわしがわざ／＼出て來る必要はないのである、時に汝はやまぬなりてよいと思ふ事もあらうが、それで實際よい程ならば、何も我は汝の爲にわざ／＼苦勞はいたさぬ、又汝の心が眞實それですむならば、汝は疾うに安心をいたしてをらねばならぬ、それで實際すまぬことをわしかねて知り通してをればこそ、その汝を救ふはこの我であるとな名乗りをあげてをるではないか、最後に我の心を約めて言へば、

○汝に向つて悪しきをやめよと申すのではない、

やまぬと云ふ事は我はよく承知をしてをる、

○悪しくともよいと申しはせぬ、

それでは汝が満足せぬことを知つてをる、

そのやめたい悪がやまずして、多年苦しんでをる汝の心を飽迄も察するぞよ、我は汝の胸中一から十迄知てをる、いよ／＼の最後に、我は汝に申す、汝は我を他人と思ふか、我は汝の眞實の親である、汝は我を忘れて顧みざることに茲に久し、我は汝を求めてまた久し、今日はいよ／＼時至りてか、汝に會ふことを得て我が喜悅抑ふる能はず、然れども汝は尙黙して我に答へず、喜悅の念は悲哀の涙、今はたへかねて眞に親子の名乗をいたしてをる、汝は我の眞實の子である、我は汝の眞實の親である、決して／＼他意を扱む勿れ。と

嗚呼感泣せざるを得ぬ、私は現にその時感泣いたした、今はさすがの私も、もはや小言の餘地がない、申さんとする一々は既に先方より申さるゝところ、獨りて苦にしてをる内心、

また時としては佛陀が存在するや否やなどの考をふこし、

一方には否定しつゝ、尙一方にはその存在を確かめんとて今日迄いろ／＼に汝が苦辛研究をして、しかも目的を達し得ぬことも、我はよく承知してをるぞ、かく迄申しても尙汝は今日迄の思想を思ひすて能はざるか、適切に言へば

一、汝がやめたい／＼と念じてをるその悪しき心は到底やまぬぞ、

一、汝が得たい／＼とあこがれてをる信心は絶対に得られぬぞ、

一、時に得た様な氣になつて喜んだのは、あれは自力の信心で何の益にもたぬぞ、

一、汝が信心を得た心もちもはかくあるであらうと豫想し、又かくなげねばならぬと定義を下してをるのは皆間違である、

一、汝が研究に研究をかさねて、佛陀の存在を極めんとしても、夫は斷じてわからぬ、

一、要するに多年の間汝が開きたること、知り得たること、乃至今日唯今考慮してをること皆悉く黙目である。かくの如きつばりと言ひ放たれては、今は汝多年の希望、一朝にして瓦解したるが如くにて、定めて心寂しく思ふであらう、情けなく感ずるであらう、………その汝の心寂しいところを眞に同情して、憐れに思ふこの我であるぞ、嗚呼汝はながい間悪しきをやめたい／＼と、それ計りに心を疲らしてをる、今日迄その汝の苦衷は察するぞ、しかし前にも申す通り、汝自身でその悪がやむ程ならば、

一々の情實は悉く先方の知らしめすところ、知られた丈にては我等如き邪念多き非行計りの人間は、立つ瀬がなければ、知つてしかも見捨ぬの唯一言、こゝに初めて心を安んぜざるを得ぬ、何たる御慈悲な方でありますかと、驚き且あやまりはてるより外にない、今こそは眞に善惡の思念をはなれて、安心の天地が開けたり、知らず覺えず南無阿彌陀佛々々々々々と感謝の念佛は口をついて出づ。

さて以上なが／＼と一人の人ありて申さるゝと申したることは、決して空なることを申したのではない、現に私が善惡

二つの思想に束縛せられたる多年苦惱の境涯より救はれて、眞に安心の道に入らして頂きたる佛陀の仰せてである。頂きたる仰せをそのまゝ筆に記したのである。我人共にこの如來の仰せを頂くより外に人生決して安心解脱の道はない、嗚呼これ眞實我が親鸞聖人の御すゝめ下さる他力眞宗の御法である、大聖釋尊御出世の本懐である、「如來世に興出し玉ふ所以は唯彌陀の本願海を説かんとなり、實にさうである。

佛かねて知らしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等が爲なりけりと知られて、いよ／＼たのもしく覺ゆるなり。

とは遺憾なく以上の御思召があらはれてをるではないか、何ともかとも申して見ようのない有難い御慈悲である。又御開山聖人御一生の御よろこびは如何に、

彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲なりけり、さればそくばくの業をもちける身にてもりけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけな

實に／＼申して見ようもなき御慈悲のきはまりである、今は心も言葉もたへはて、唯南無阿彌陀佛／＼である。

親鸞におきては、唯念佛して彌陀にたすけられまらさずべしと、まさ人の仰せを蒙りて信する外に別の仔細なきなり。

「あゝ今は彼是と申すことは何にもない、南無阿彌陀佛／＼、思はず知らず私はい身の仕合ばかり喜んで居た、さて心を静かにいたして、執筆當初の精神にかへり、今少しく私のこの文を草する真意を明かにして終りを結ばねばならぬ、尙そのまへに、これ迄の文にて充分如來の御真意は傳へられてあると思ふけれど、實際に於てその御真意が頂けざる人の爲に、一言申しておかねばならぬ、それは必ずこちらにいはいはくがあるのである、依つて今こゝに三種の機類を擧げて、その安心の出來ざる病根を一々指摘して、それ／＼適切なる藥を興へて置かうと思ふ。

一、には自分ほもはや安心を得てをると思ふてをる人、この種の人は一番氣をつけねばならぬ、折角かほど迄こま／＼とやるせない大悲の仰せを申しても、ありがた／＼と上すべりに聞き流してしまふ、なるほど今迄聞てをること、同じ事、自分の頂いてをるところと少しもかはらぬ、やはりこのまゝなりの御助ぢやと云ふ心もちにて、なか／＼目がさめぬ、これは「自分は既に頂けてをると云ふ腹が底にある、病根は即これである、この病根はなか／＼自分で自覺しにくい、かゝる人は何はともあれ、蓮如上人の「得たと思ふは得ぬな

り」との一大鐵槌を先づ頂かねばならぬ。

二、頂けぬ／＼と苦しんでをる人、悪しき心がやまぬ／＼と泣てをる人。

この種の人は、折角斯様な文を見ても、悪しき方はなるほど／＼と頂きながら、一方よろこびの有様に目をつけては、どうしても左様な工合になれぬ／＼と氣をあせつて、肝腎な御慈悲の程を少しも頂かぬ、この種の人は、蓮如上人の「わが身の罪のふかきに目をかけず、唯本願の一すぢを仰げよ」との仰せそのまゝを頂かねばならぬ。

三、なるほど左様に親切に申す人ありとせば、我等もこれに越したる満足はなけれども、その根本の佛陀の存在をそれ自身がわからぬではないか、

この種の人は從來寺参りをする人よりも、寺参りの側に於ても、内心にはち／＼と思ふてをる、先づ一般に今日の青年に多い、この種の人は先づ斷々乎として警告を下さねばならぬ、佛陀が汝にわかつてたまるものか、汝は上來述べぶるが如く善惡相對の思想海に感溺してをる、所謂崖の下身分てはないか、汝が現にその通り崖下に溺れてをればこそ、崖上より救ひの綱が降りてをるではないか何もはじめから崖上のことかわかる程なら、救ひも綱も要らぬではないか、綱と申せばすぐにたとへの方に拘泥して、如何にして攫むかをささ／＼に考へる、綱と申すも外ではないぞ、汝のその苦衷を飽迄も察するぞよ、われ能く汝を救はん唯この一言なるぞ、この位にてはなか／＼満足もすまい、この種の人は先づよく／＼我身の程を省みて佛願の生起本末を頂かねばならぬ。

私はこの種の人の爲にはあらためて一文を草して見たいと考へてをる、まづこの位にしておかう、この位と申せば安心の出來ざる病者、他に幾種もあると思ふか知れぬけれど、よし幾種ありとしても、この三種のうちををさまつてをること、を忘れてはならぬ、さて話しが横道にそれて居たが、いよ／＼本にもどり本文の意を明かにせねばならぬ、

○悪しきをやめよ善をなせ。 ○悪しくてもよい。 その何れの道も、眞に我等の安心の道にあらぬと云ふことは、ほゞわかつたであらうと思ふ、しかして尙

○その悪しきものを飽迄も見捨ぬ の唯一言。

眞に安心解脱の道であることも解せられたであらう、さりながら尙茲に痛切に一言せねばならぬことは、これを客觀にするほどと理解した丈では何の益にもたぬ、それは依然として腹はふくれぬ、信仰は餘所事ではない、自分自己の直接の問題である、この飢へに飢へたる自分自身が、直接佛陀のやるせない御恵を頂て、眞に満足を得させてもらふことである、かく申す事が、實は、はや説明風になつた、甚だ面白くないけれども申さねば讀者の誤解を正すことが出來ぬ、嗚呼また已むを得ぬことである。……今日では從來信仰に志す人のみならず、一般青年の方々にも一分の槩になれがしと思ふ

て、なるべく専門の佛語を抄なくし、多くは自己の經驗を基として記したることなれば、或一部の讀者には却て誤解を招きさせぬかをおそるゝ、ぢやと申して今は委しく申すの時もないから、以上の意味合を極簡単に御法文の上よりして讀者と共に頂き奉らうと思ふ、御文はまづ前にも頂き奉つた祖師

聖人常々の仰せたる歎異鈔の一節を引用いたさう、

彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、偏に親鸞一人が爲なりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんと思召たちける本願のかたじけなさよ、

私共内心の苦しみは一人／＼の問題にて、誰一人代つてくれるものはない、この苦惱に沈める私を、現に御救ひ下さるために、なが／＼の御苦勞遊ばしたのである、即一人が爲なりけりである、さればそくばくの業をもちける身にありけるを、そくばくの業とは、因果必然の道理に支配せられて、現在この私が、やむにやまれぬ煩惱の發作、縁に觸れては吾ながら驚く程の非倫非行、今日迄實現したる事のみにも、それは／＼親にも兄弟にもあかさされた事ではない、口にも筆にもあらはさるべきでない、こゝは御同様我身の上に於て一人／＼反省せねばならぬ、これが決して過去のみにてない、現在乃至將來も又同様である、經文の中に「さるべき業縁の催せば如何なるふるまひをもしかねまじき凡夫なり」と仰せられである、また「兎の毛羊の毛のさきにるちりばかりもつくる罪の宿業にあらずと云ふ事なし」とも書いてある、これが即そくばくの業、このそくばくの業をもちける身とは他人事ではない、現在この私のことである、こゝは讀者も御一人／＼よくかへり見て頂かねばならぬ。

このそくばくの業のために、生きてはこの世で苦しみ、死しては彼の世で永劫の苦患を受けねばならぬ、これ自因自果他を恨むる勿れにて、天地自然の道理である。この天地自然の道理を明かにして、我等に極苦與樂の方法を示し玉ふが、

諸佛の慈悲である、乃至聖人の教訓である。わかり易く申せば本文の主題たる「悪しきをやめよ善をなせ」、この廢惡修善の大法を、佛敎中の聖道門と名づく、そのせまき意味に限られたるものが世間道徳である、如何にも人間として當然修すべき道ではあるが、決して安心の道でない、しかも前に反復詳述したる如く、現在の我等としては、絶対に不可能である、こゝが即そくばくの業をもちける身である。このそくばくの業をもちける身を救はんが爲に、特に現はれ玉ひしが阿彌陀佛の本願である、本願とは申す迄もなくこのそくばくの業をもちける私共をあはれに思召して、我よく汝をたすけんと呼びかけ玉ふ、やるせない親心である。この親心、この本願まします以上、我等のたすかると、たすからざるは、もはや惡業の有無にかはらぬことになつて來た。さればこそ親鸞聖人は、超世無上の本願とか、超日月光とかたへ玉ふ所以である、して見れば、要は唯其本願の親心を頂くと頂かざるが、苦樂昇沈の別れ目である。如何に頂き奉るか、そくばくの業をもちける身にてありけるを、唯之丈である。そくばくの業があるから困るとは仰せられてない、またそくばくの業があつても間違ないなどとは、一言半句も仰せられてない、こゝは、最も大切なるところにて、こゝをうつかり頂くと、萬劫たつても安心は出來ぬ、日頃御寺參をいたして本願のいはれを聞きなれて居る人は、却て大様に聞きながす傾向がある。かへすも痛ましいことである、御同様耳をそばだて、頂かしてはねばならぬ、安心の出來ると出來ざるは、實にこの一點を頂くと頂かざるとにあるのである、くど

い様なれども、重ねて申す、そくばくの業があつてもてはな、そくばくの業をもちける身にてありけるをである、換言して見れば、悪しき心のやまぬこの身にてありけるを、ながい間御信心が頂けぬと苦しんでをるこの身にてありけるを……たすけんと思召たちける本願のかたじけなさよ、本願とはやるせない大悲の親心、この悪しきのやまぬ性根をよく御承知下されて、それを他迄見捨ず、飽迄とは悪しき性根のやまぬなりて御助けなどと横着な考へを以てをるこの私が、悪う御座いましたと、懺悔の涙をこぼす迄、悪しき心がやまぬと苦んでをる私が、ながい御心配をかけたましたと眞に安樂な心にならして頂く迄。御見捨て下さらぬのであります、今は何ともかとも申す言葉なく、彌陀の五劫思惟の本願をよく案ずれば、偏に私一人が爲なりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思召たちける本願のかたじけなさよ、と頂き奉る計りである、今は御開山聖人の御領解は、そのまゝ私の領解である、南無阿彌陀佛を頂けば南無阿彌陀佛の主になることはほんに實際である。こゝに於てか次の御文を頂かずには居られませぬ、

かたじけなくもわが御身にひきかけて、我等が罪惡の深きをも知らず、如來の御恩の高き程をも知らずして迷へるを、思ひ知らしめんが爲にて候ひけり、と

(中略)私は多年の間、此明師に向て、内に反抗の心を持つたものである、その主なる原因は、記者嘗て道を求めて東都に至る

その師に會ひて道を聞く、いろ／＼と御説き下さるけれども、わからぬ、師問はる、汝は今日迄如何なる書を読み來りしかと、余はこれ／＼なりとありのまゝを答ふ、師は言下に是非なるを告示せらる、今より思へば勿體なき事ながら當時余は甚だ不快の感を抱いた、その故はその自分の讀んでをる信仰書なるものが、今日全國の青年を指導してをる最も有力なる書である事を信じて居たからである、尙一步を進めて申すならば、自分自己が現にその書籍に依て今日迄勉まらざる導を受け、慰藉を得てをるからである、今日信仰がわからぬとて求法の爲上京したりとは言へ、尙一分の未練は、否その當時に於て一道の光明は、その書籍を通して見認めて居たからである、かく不快の感を抱いたりとは云へ、一方その先生の熱心なる御態度に敬服せざるを得なかつた、當時不得要領の中に東都をたち、嗚呼たつがたつ迄しかも車に乗る迄御見送り下されの御話、今から思へば勿體至極もないことである、歸途彼地、此地に道を求め、ともかく一段落をつけて歸國したのである、これは實に明治四十年六月のことであつた、その後數年、其師西下に際して會することも數度、何とやら彼、我を入れず我又數年前の一語忘るゝ能はず、故に又我も彼れに従ふを好まず、今は斯様なこと書くだに勿體なけれど、しかし我もへらく、我は九州に名を得たる信仰家なり、彼われをいれずとも何の不足かあらん、我は彼の弟子にあらず、開山聖人直々の弟子なり、直接大悲に救はれたるの我なり、乃至我と同一の信念をもてる大家は世に滔々たり。彼れ人に告白を強ひて其誌に掲ぐ、これ名聞にあらずや、彼れ曰く某は

わしの話を聞いて立所に入信せりと、余は思ふ入信なんて凡夫の身として眞にわかるものか、よししか思つたところが左様なことは輕々に口外すべき事でない、又わし／＼と申すはまさに獨覺心の傲慢にあらずや、我祖は弟子一人もたずとこそ仰せられるにあらずや、と云ふ様な工合にて、記せば限りもない事ながら、かくの如く常に反抗の念を持してをつた私である、かく表面を申せばたとへ邪ながらも、如何にも強さうに聞こえるが、内實は甚だ弱き私である、野卑なる私である、あまり書きたくもないが唯一言を陳べて當時の内心を發表しておかう、上述の如く告白を強めるのは云々と申しながら、その實は自分に告白を要求してもらひたい、かくもいまだしき名利心から居りながら、それをば自分気がつかぬ、なるほど一分の氣づきなきにあらぬど、かゝる心に氣づかせて頂くのが御慈悲ぢやなどと申して、根本の懺悔心どころか、勿體なくも一々先方の欠點として目をつけてをる、實に申して見ようもない外強内柔、汚劣至極の私である、かくも反感を内心奥深く抱きながらも其先生の著述せらるゝ月刊の雜誌を讀んで居た、さうしてありがたい／＼と頂けてをる積り、何が何やらさつぱりわからぬ、かくの如きの私なれど茲にその先生と私との因縁のされざる一つの有力なる媒介者がある、それは數年前より一人の信仰厚き友人を得たことである、このことは私に取りては特筆大書せねばならぬ大切な事となつて居る、この友人は衷心よりその先生に歸依いたし、また先生の信任も甚厚いのである、かくの如きの友人を得たと云ふ事は今から思へば決して唯事でない、

しかしその當時に於ては左程重視したわけではない、單にありがたい御方である、感心な御方である、信仰厚き御方であると云ふ心もちにて、私と大の仲善である、かくは申すものゝ、あり體なことを申せば、信仰に於ては自分が兄の心もちで居た、佛教のことは自分がくはしいと思ふて居た、さりながら内心にはどうしても敬服せざるを得ぬのは此友人でありました、ともかくかくの如くにして信仰家を以て世にたち、多年得たりし私も、さすがに人生實際の苦闘に破れ、遂にたつ能はざるに至つた。(この内容は又詳述する時であらう)この時數年前仰せられたる彼の先生の一語、即多年余の反感の原動力となつて居たその一語、(そんな書を読んではいかん)はじめて幾分か思ひあつた、さりながら未だ自分は其の先生に走らうとはせず、當初先づ今日迄我を愛して下さる大家に走つた、縷々御さとし下さる千言萬語、今迄涙を流して聞て居た様な話が、こたびは何等の慰藉とも力ともならぬ、次には多年間蓄積してある彼の先生の雜誌を読みはじめた、少しもわからぬ、次は御聖教にしくはなしと、眞宗御假名聖教と云へる大書を一週間で讀みつくした、多々ます、五里霧中、最後に彼の友人に走つた、彼の友人は我が手を取りて其の先生に導いた、今は退引ならぬ場合となつた、余は其の中にも數年前のことに鑑み、一面斥けられる事を豫期してをつた、若しすることもあらば蹶然退去すべしとの念も宅を出る時より持つて居た、どこへ迄も強情我慢私である、かくの如き豫想を抱きつゝ、屠所にひかる、羊の風情にて、先生の前に跪いた、當初この先生に御目にかゝつて以來、實に五

年振りのことである、嗚呼この時は余の煩悶苦惱の頂點であつた、その苦悶の心狀は今略すけれども、唯一言披瀝して置きたい、それは今日迄信仰家として世にたちたる自分として、其信仰の壞れたり云ふ事の社會に發表さるゝと云ふ事、即信仰名利とても名づく可き此心狀の發作は、内心苦惱中の有力なる一つであつた、實に信仰の壞れたり云ふ事の、同じ斯界の人々に知らるゝと云ふ事の苦しかりし事は、恰も生皮を剝がる、氣もちがした、願はくば信仰の非なりし事を社會に發表せずして、しかも本ものを頂きたい、そしてこのまゝ今日の名望を持続し得たならばと迄思ふた、即究極迄虚名心を擲つことの出来なんだ私である、かくの如きの私も内心の苦痛には換へられず、おそろし、その先生に苦しき心中を披瀝した、意外も意外、先生は余に對して排斥どころか非常なる同情の顔せを以て向はせらるゝ、余はその時甚奇特の念ひがいたした、御説き下さる一言一句、身に沁む心地して、懺悔の念、おひくゝに萌す、かくの如くにして御聞かせに預ること三晝夜、不思議なるかな悶々の心いつしかに消え、一念喜愛の信心は、明かに余の精神界に顯現し來る、衷心よりの慚愧と感謝の念、油然而して交々湧き、自づから念佛は口をついて出つ、其時の心狀は到底筆紙の盡すところにあらず、唯南無阿彌陀佛と申す計りである、以上述べたる、生皮剝かるゝ様にと迄思ふた信仰名利など、今は少しも問題とならなくなつてきた、心中實に安らかな念ひである、光風霽月とはかゝる心狀を申すのであらう、これ明治四十四年八月五日の事であつた。此位の事にてはあまりに物足らぬけれど、他

日の機會に譲り、之にて余の告白は止めて置く。

昔し我御開山聖人を害し奉らんとせし山伏辨圓は、聖人の尊顔に向ひ奉るなり、害心忽ちに消滅して、あまつさへ後悔の涙禁じがたし、やゝあつて辨圓ありのまゝに日頃の宿鬱を述べすと雖も、聖人又驚ける色なしと、私がこの知識に會ひ奉り、一念信樂開發したる有様は、まさに辨圓入信のそのまゝなり、辨圓は直ちに刀杖を捨て、頭巾をぬぎ、柿の衣をあらためて聖人の弟子となる、明法房これなり、晩年に至つて辨圓昔し聖人を害し奉らんとせし板敷山に於て、つらく往事を懷ふては、轉た今昔の感にたえず、山は山道は昔しにかはらねどかはりはてたるわが心哉と、私頃日九州各地の傳道を終へさせられて歸京の途につかせ玉ふ恩師を送りて下の關に至る、彼の地は今より七年前私軍籍にあるの時、在任の地なり、當時既に信仰家として世に立ち、人を導くと稱しながら、未だ自我迷執の夢破れず、一旦信仰上の蹉跌を來たし、前記東都にのぼりしはこの時代なり、彼れを思ひ是を思ひ、しかして今現に恩師と惜別の情禁じがたく、送つてこの地にあり、山伏辨圓の山は山……の述懐は今はそのまゝ、記者の述懐である、我れ入信以來常に心に深く印象されて忘る能はざるはこの辨圓入信の一段である、余は或は辨圓の後身ではあるまいか、辨圓今は常隨昵近の明法房、さてもありがたい事である、嗚呼一々恩師の御恩である、かくの如くなが、と書かせて頂くのも恩師の御蔭である、たとへ一部の人よりもかりにも先生などの稱呼を頂くも、恩師の御蔭である、かく恩師の御恩を思はせて頂くにつけても、忘る可らざるは彼の友人の御

恩である、恩師と良友をもてる我は、何たる光榮なるかな、本をたゞせば一々是れ如來選擇願心の御廻向ならぬはない、嗚呼身を顧みれば依然として煩惱熾盛、愛欲名利の一塊である、何一つとして他に示すべきなく、又ほこるべきの一物もない、唯身の仕合を喜ばして頂く計りである、南無阿彌陀佛。

如來大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし
知主知識の恩徳は 骨を碎きても謝すべし

嗚呼執筆當初の精神は一變して全く自己の感謝告白文となつた、縁あつてこの文を手にもされる諸兄姉よ、余のこの文を草する根本精神は、余が多年定散の自信に惑ふて、その惑たるを自覺せず、最後に眞の知識に遇ひ奉つて、はじめて他力金剛の眞信を開發するを得たるの故を以て、若し世に私と同一の過程を辿りつゝある人あらば、早く明師に會ひ眞に信樂開發あれがしと思ふ心や甚切なり、余が入信以來一日として忘る能はざるはこの事なり、歎異鈔文に曰く
幸に有縁の知識に依らずんば争てか易行の一門に入ることを得ん、全く自見の覺悟を以て他力の宗旨を亂ること勿れ、と今も昔しもかはらぬは實に信仰上の問題である、私元より無學、文辭共に拙、のみならず、やるせなき情熱のあまりとはいへ、過激、失敬の言句も尠なからざることと思ふ、殊に全文一氣呵成、公務宿直の余暇、夜を徹して急草したるものなれば、意多くして時足らず、身心さすがに疲勞しては、前後錯綜、思ふ十分の一だに發表すること能はざりしは、甚遺憾とするところなり。讀者乞ふ幸に諒察あれ。
大正二年六月三日の朝 九州福岡にて

講 話

智愚の毒を滅す

(求道學會日曜講話)

近 角 常 観

一 機 縁 純 熟

今年には信仰上有り難き年と思ふこととあります。新年以來
引き續き信仰につき話して居るのでありますが、殊に此頃は
諸方面とも、非常に因縁が熟して來たと思ふ事とあります。
爾る處其の諸方に信仰が熟して來たといふは、強ちに多くの
人が擧つて、信仰を聞かれるといふことも無く、又世間の
思想界に信仰の機運が目に見えて、著しく起つて來たといふ
のでも無い。唯私の深く感ずるは、從來此の信仰の事に縁の
有つた總ての人々が、不思議にも段々自分自身に直接に佛の
お慈悲を頂いて喜ばるゝやうになり、又既に喜んで居る人は、
更に深く氣附きて一層喜びを高め、又お慈悲に遠のきて居ら
れた人々は、種々の御縁により廻り廻り再びお慈悲に立戻
るといふやうになり、十年二十年來養はれてあつた御縁が熟
して、お慈悲をお喜び下さる人が、毎日／＼出來てくるとい
ふ風に私の心に感ずるのである。これは畢竟大悲の親のみ心が
總ての人の心中に、到り届いて下さる時機到つたもの、又從來
お喜び下さる方には、猶ほ一層大悲をお頂き下さる時機到つ

たものと、深く感ずることとあります。であるから今日の題
は、『智愚の毒を滅す』と出しました。即ち智慧と愚鈍の毒を
滅して下さるといふのである。今日は此の題により、今言ふ
從來喜んで居らるゝ方が、自分の缺點を自覺し、又は自分の
氣づかざる處を知らせて貰つて喜ばるゝ、其の有様を申述へ、
進んでは斯く諸方面に因縁の熟する有様につき、申述べんと
欲する次第であります。

二 わかるわからぬで助かるので無い

「智愚の毒を滅す」とは、これは恰も昨年の第二回夏季求道會
の時、最後の講話に申したる『信卷』大心釋の最後の御言葉で
あります。即ち恰も昨夏求道會の最後の止め言葉となつた御
文であります。先づ之に就きては、後に叮嚀に本文につき申
述る事と致し、先づ今日私が、此の御言葉につき聞いて頂き
度いと思ふ肝腎の事柄は、我々が廣大の佛のお慈悲に對する
に當り、我々がこのやうに淺間しく、分らぬことでは仕やう
が無いと思ひて、自分の分らぬことや、自分の罪深く、自分
の煩惱の止まぬ事を悲み歎くといふ、此の自分の愚かなるこ
とを歎く、といふことがある。けれども、佛のお慈悲は、其
の私の悪しく淺間しく罪深き處、私の最も心配になつて仕や
うが無い處、周囲の誰もが最も了解して呉れぬ處、總て斯く
の如く私の最も暗黒なる處をば佛の方で先き知し召し下され
て、其處をばお見捨て無きが廣大のお慈悲故、茲をば頂く一
念に、如何なる愚かなる者も、其廣大なる御哀れみに満足し、
其の遣る瀬無きお心一つに安心して、手丈夫に喜ばせて頂く
事が出来るのである。又自分の心に於て、其のことは能く分

つて居る。その事は能く承知して居る。佛は必ず此の者を助け
て下さるに間違はぬのである。あゝである、斯うである」と、
自分では能く分つた積りて居るのであつても、若しや其の分
つたが自分の智慧を雜えて、自分の心で「然う思うてる」ので
ありたり、自分の合點了解であるならば、それは自分の心で、
然う思ひ、然う決め込んで居る迄である。然う思うて居る心
は、矢張り佛を疑ひ隔て、居る此方のわたくし心に外ならぬ
のである。故に斯く此方の方より分つたなど、思う其の心を
遣る瀬無く哀れみ思召し、お見捨て無き廣大の慈悲に遇ひ奉り、
茲て其の心の夜を明けさせて貰はねばならぬ事である。又此
方は分らぬといふのである。などと思ふて居るのも、矢張り
凡夫の智慧で然う思うて居る迄である。佛のお慈悲は設け分
つても、分かつた處が有難いのは無い。又分らぬといふの
も、凡夫の智慧で然う思うて居る迄である。佛より御覽下さる
時は、我々の分る分らぬで、助かるので無い。我々の分る分ら
ぬや、我々の善し悪しは、畢竟お慈悲の上より言ふ時は、凡
夫の淺慕な智慧で、然うこしらえて然う思ふて居る迄のこと
である。て其の哀れなる様をば佛の方より能く知召し下され、
其の私の善いと思ふが善いて無く、其の悪いと思ふが悪いて
無く、其の仕て見やう無き有様をよく御承知の上で、お見捨て
無き廣大の御眞實を聞く一念に、私の智慧も愚も、其の遣
る瀬無きお慈悲に滅され、佛智不思議の有難やと喜ばせて貰
へるが佛の廣大のお慈悲である、との事を叮嚀に話し度いと
思ふのであります。

爾る處今も申す如く、私の近頃殊に難有く思ふ事は、今年

は先づ第一に、近きは私の一家を始め、又當學會の人々の間
に於ても、又平日から常に講話を御來聴下さる重立ちたる方
々を始めと致して、信仰上常に聞いて居らるゝ處に、更に一
段の驚きを立て、或は又自分自身の心狀に省みて、色々お喜
び下さる方の多いのである。故に今申す信心のごく「かなめ」
の味ひを、之等の實際上の味ひより、喜ばせて頂き度いと
思ふ事とあります。

三 信仰上二種の傾向

昨年末の講話(本誌本年第貳號參照)に於て『佛智不思議』
の題にてお話したのであります。昨年最後のあの講話が、多
くの人の大層不審を起させ之がもとになりて信仰が起つたや
うにあるのであります。勿論夫れも其人々々の御縁に従つて
色々の原因があり、一概に言へぬのでありますけれども、昨年
の暮れに於ては此の事を申したのであります。兎角信仰を喜
ぶにつき、二種の傾向がある。て著しくお慈悲に氣がついた
人、即ち今迄苦しみ悩みて法を求めて居た者が、著しく佛のお
慈悲の深きに氣がつき、自分の淺間しき根性の底の底迄知り
抜きて、而も其の者を見捨て給はぬ廣大のお心を頂きたる人
は、一旦は心の悩み全く取れ、胸中一點の滯り無く、非常に
うららかに喜ばせて貰へるのであるが、其の人は佛のお慈悲
に打あかされた其の喜びの餘り、いつの間にか其の自分の喜
びに目が着き、知らず識らず、自分は佛の恵みを頂いて仕舞
ふたと、極端に言ふならば、悟つたやうな心持ちになり、
「もう一切の煩悶も、罪惡も滅んで仕舞つたから」と、恰も此
の世ながら佛になつたやうな氣で喜ぶもの故、いつの間にか

ついで、「らく」になつた其の自分の心持を頼みにする間違ひに陥入り、強ち自分の罪の仕て見やう無きを見捨て給はざる廣大の御恩を忘るゝのては無けれども、夫れとは無しに夫れが昔の事になつて仕舞ひ、自分の「らく」になつた心持ばかりを喜ぶやうになるのである。すると之は悟りの間違ひに陥入つて仕舞うのである。青年諸君の中に之が多いのである。能く自分は念佛稱へるでも無しに、「己はもう分つた、頂けた」といふやうな事になるのであります。すると又一面には、佛のお慈悲を幼よりのべつに聞き、本願の事は常に耳なれて居る宗教の家庭に生れた人であるとか、或は平日、聴聞し慣れて居る同行信者の人達、さなくとも青年の方でも聞きなれて居る人達などには、いつ喜んだといふ事もなく、「斯く惱みの止まぬ者を、お見捨て無きが廣大のお慈悲である」と言つて、一向茲ぞと取り押えてお見捨て無き眞實の頂けて居ぬ人があつてもよく同行信者の人などは、「御信心頂いても今も昔とちつとも變ることは無い、同じである」と、お慈悲で心の夜が明け疑ひが取れるといふ處は更に無くして、「斯くの如く淺間しき、悪しき心の其の儘で此の者をお助け」と茲の處で「けじめ」が立たず、のべつになつて居る人が多いのである。すると之では、お慈悲でがつくり自分の心に頭が下り、今迄人を不足に思つて居つたは、全く自分が悪るかつた、と此方の頭の折れるといふところは、更に無い。いつの間にか「悪うてもお助けである、淺間しくてもよいのである」と、自分で然う言つて居る積りでは無けれども、知らず識らずの間に、おのづから茲になつて仕舞ふのである。斯くなると、佛智不思

議が、更に不思議で無くなつて仕舞うのであります。

四 不思議の眞意の頂けて無い人

一例を申せば、舊臘も或る方がお訪ね下されて、「私は佛智不思議を信ぜさせて頂きました」と仰しやるから、私は「夫れでは何うお頂きなされたか」とお尋ねしたすると、「助からぬ者をお助け下さるが、不思議である」と言はるる。「それでは其の味ひは何うて有りませうか」とお尋ねすると、「さあ其處になるともう分らぬのである。」「助けて下さるといふは、極樂に行くことか、など、言ふやうな事になり、此の淺間しき者を眞にお見捨て下さらぬその味ひは、更に頂けて居無いのてあります。」「此の種の人の喜ばるゝ、淺間しき者を佛はお助けは今の悟りにおちる人とは異なりて、遣る瀬無きお慈悲に打ちあかざるゝといふ處は更に無くして、其の上に我と我が手を擧げ、稱名相續するやうになるのでありますけれども、今の我が心に眞に遣る瀬無きお恵みを頂いて、お慈悲に夜が明けたといふ處が少しも無い。常に言ふ如く、佛のお慈悲と我々の悪しきとが、出違ひになりて居るのである。」「我々は悪るいけれども、佛は此の者をお見捨て無いのである。」「と、茲の處で我が身の悪しさが手放しになりて、喜ばせて貰ふといふ處が、更に出て居無いのである。之では眞にお慈悲が頂けたにはならぬのであります。然うては無く、此方は眞に悪しき其の者が、廣大のお慈悲で其の悪の大もとが滅され、頭が下るといふ處が無くてはならぬのである。」「此の類の喜ひ方を仕て居らるゝ人の不思議は、不思議が唯言葉丈けになりて居る。」「助らぬ者を助けて下さるが不思議である」とか、或は「佛

智不思議を信ずる」とか言つて居ながら。其の不思議の眞の味ひが、更に分かつて居無いのであります。さて斯く迄言ふと、之等の人も不審が立つのでありますけれども、一般には不思議々々と言ひ流して、其の不思議の肝腎な處は何處であるかとは言はぬのである。昨年末の講話に於ても申したのてあります。眞宗の肝腎は、此の不思議の分ると分らざるに於てある。彌々眞宗の御正意が頂けると、頂けぬは、此の不思議が分ると、分らざるで決まるのであります。處が今の聞き慣れて居られる人々は、他力に於ては不思議が當り前と思つて居らるゝもの故、不思議々々々々聞いても更に驚きを立てぬ。夫れ等の人々の思つて居らるゝ不思議は、不思議々々々と押えつけた、不思議の丸飲みである。茲が先達て來皆さんの驚きを立てられた處なのであります。

五 不思議の味ひ

そこで順序を踏まなければならぬ故、茲て不思議の味ひを申します。不思議とは何か、不思議とは思ひがけない事が不思議である。我々が向うに行くと、彼の人に遇はれるからと、行きて遇ふたのなら、不思議でも何んでも無い。處が我々到底遇はれまいと思つて行つた處が、計らずも尋ねて居る人が、向ふから來た時は、之は實に思ひがけ無いたのである。之は實に不思議ぢやと、此の思ひがけ無き事に會つた場合に出る言葉であります。處で今の眞宗の教へを聞きなれて居る者は、此の不思議の意味を甚だ悪しく、俗に奇妙といふ程の意味に取り、助からぬ者を助けて下さるは、不思議ぢや、奇妙ぢやと、いふやうに言ふて居るから、いつ迄も不思議の眞意が分らぬ

のである。我々が此のお慈悲の上で不思議といふは、實に思ひがけもなく、此の度び大悲の親に遇ふたのであるから、實に不思議なのであります。然らばそんなに驚かんならん程迄に夫れが不思議であるは何うかと言ふに、茲はお慈悲の上の言葉でいふと、我々は御本願慣れ、御教化慣れが仕て居る故に、然ういふ慣れのせぬやうに、世間の上で分り易く申します。我々は日常の日常に於て、「我々は悪しきことを仕てはならぬ、善き事をせねばならぬ、善いことをすれば人は賞める、悪し事をすれば、人は憎む。設ひ人が何れ丈け賞めようと、悪るい事をすれば自分で氣持ちが悪し、又人がどれ丈悪しく言はうと、善い事は何處迄も善いのである」といふ考えて、日常の日常を仕て居るのである。處が實際其の通り、其の善いが出来、悪いが避けらるゝならば、事は無いのであります。我々けれども、實際に於ては我々は、我々が自分で決めた其の善し悪しさへ、思つてやう實行が出来ぬ。況んや其の善し悪しが、我々自分の都合で、自分によきをば善しとし、悪しきをば悪しと決めた善し悪しであつて、善いといふのも、斯くすれば自分の爲めに善いといふ處より、善しと仕て居るのであれば、悪いといふのも眞に心から懺悔しての悪しといふでは無くして、悪しうては自分が困る處から、悪しと仕て居るのである。第一之からしてが、甚だ當てにならぬのである。處で佛のお慈悲とは何うかといふに、茲で意外千萬な事が起つて來るのである。夫れを今更の如く私は茲てお話する。夫れは今更の如く皆様にも聞いて頂き度いからである。實に思へば思ふ程意外なる事が、茲に起つて來るのであります。

六 意外なる西岸上の喚び聲

さて夫れは何か。初めよりお話するならば、斯く我々は善き心は起らず、悪しき思ひは止まず、實に自分如き仕やらの無い者は無いと、自分の方より人に遠慮し、隔て、懸れば、人も此方を隔て、疎んずるに至る、實に仕て見やうなきが我々の有様である。茲に於てか、人の事は兎に角自分さへ隔てぬやうにすればよいと、何程思へども、我々は其の隔て根性が何うしても止まぬ。自分程悪い者が無いと言つては人を隔て、向ふが悪むと言ふては相手を隔て、甲に乙にも隔て根性が、何うしても止まぬのである。して夫れで自分ながら善い、と思つて居るかといふに、其の癖悪いと思つて居る。

自覺の上から然ら思つて居るのでは無けれども、其の爲め涙を流し、泣いて悲しんで居るのである。斯く之れ程迄に止め度い／＼と思へども、何うしても悪しき根性が止められぬ世の中に、計らんや一人の人あつて此者に言はるゝには、イヤ／＼然らては無い、我は君の隠して居る心中を、皆な知つて居る。君のいふ悪いは、成る程悪い。我は決して善いとは言はぬ。併しながら我は君の如く、君が悪むといふて、君を斥ける事はせぬぞ。君が悪しきが爲めに、君を捨てて居る事は何ぞ。君は君自ら迄が自分が悪むと言つて、自分の心を隔て、居るのであるが、それは汝がまた我が友情を知らぬからであるぞ。我とて君が有様を見て、決して善いと言ふては無。如何にも悪しき浅間しき君であるが、其の浅間しき君を飽く迄捨てぬのが、我が君の爲め友たる處であるぞ。否な飽く迄捨てぬ計りてなく、何うか早く此の我が心を届けて、君

の苦しみを抜きてやり度いと、態々茲迄出かけて来た我である。我は夫れ程迄に君を思ふの故、此の我が心が君も知られたら、入らざる苦勞は早く止めて、何うか我れが心を能く味はうて呉れ」と、此方は人を疑ひ隔て、自分の悪しき爲めに、身も引き裂かるる計りの苦痛を仕て居るのに、計らんや其の者に向はせられ

西岸上に人有つて喚つて言はく、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん。衆べて水火の難に墮せんことを恐れざれ。との廣大の呼び聲なのであります。

七 尋ねなき大悲のお心

而して茲で言はなければならぬは、常に言ふ如く、「能く」の一字である。能くとは其私の悪しき心の有り丈けをよく御承知の上で、其の悪しきが止まぬが哀はれと、其の廣大の同情のお力で、遂に私の心配の根本を融かしおはせる迄、飽く迄、哀れんで下さるが「能く」である。で、我能く汝を護らん、衆べて水火の難に墮せんことを恐れざれ」と、汝は貪欲の波逆立ち、瞋恚の炎燃え、其の爲め晝夜苦しんで居るのであるが、夫れを恐れな、氣づかひするな」とは何故であるか。設ひ如何なる猛火來るとも滅ぶること無き汝の其の貪欲瞋恚の心に向つて、我は夫れを可哀想に思ひ、此方よりは貪欲瞋恚を離れた廣大の心を以て、常に其の者に向つて居るのであるぞ」と、茲が實に肝腎なのであります。私は常に人に向つて貪欲瞋恚の心を起して居る、夫れを佛は横合ひから救ひ取つて下さる、といふのでは無い。私の貪欲瞋恚のひどい爲め、慈悲

有る人も既に皆な手を納めて仕舞はれた我々である。其の一旦出された手を引つ込めさせて仕舞ふ、夫れ程迄に我々は悪いのである。然るに佛は是れ程迄に悪い我々の貪欲瞋恚を皆な知り抜いて、其の奴が實に哀はれだと、自分の一身を投げ出して其の者に向つて下さる廣大のお慈悲なれば、此のお心の頂かれた一念には、茲でころりと此方の貪欲瞋恚を佛のお慈悲に取られて仕舞ふ處があるのである。此の取られた味ひが、一念には無くてはならぬのであります。して其の取らるゝ味ひは、心中に成る程有難いと頂いた一念、自分で取らうと思ひて、取れるので無く、不斷煩惱得涅槃」と頂くと、最早や夫等の罪咎が何等の心配にもならなくなつて仕舞ふのである。故に蓮如上人の『御文』のお示しは言はく、

されば無始以來つくりとつくる悪業煩惱を、のこるところもなく願力不思議を以て消滅するいはれあるが故に、正定聚不退のくらゐに住すと云々。

又親鸞聖人は轉惡成善と示し下されてある。又『唯信鈔文意』には此の轉の意味をお知らせ下されて、
轉ずといふはつみをけしうしなはずして、善になすなり。
よろづのみづ大海にいりぬれば、すなはちうしほとなるがごとし。

との御言葉もあるのであります。即ち今日迄心に人を憎み隔て、居る我々が、其の飽く迄私を憎まず隔てぬ廣大のお心に遇ふ時は、今迄隔て憎みて居たは實に悪しかつた、申譯なかつたと、其の隔て給はぬ遣る瀬無き御親切の爲めに此方の頭が下り、あ、よくも、此の淺間しく、此の仕て見やう無き根

性では、最早や一寸も動けぬと思つて居た世の中に、其の根性の悪いのが可哀相である。此の隔ての多いのが哀はれてあると、夫れ程迄のお心とは、實に／＼恐入りました」と、其の如何にもお慈悲の深き爲め、如何なる疑ひ隔ての根性も最早やさかなくなり、實に何とも申譯無いとなるのである。で此のお慈悲頂いた上より言ふ時は、此の仕て見やう無き私の爲めに、斯程迄に遣る瀬無き思召し下さるお慈悲が實に不思議である。蓮如上人が、この惡凡夫が佛になるが不思議と仰せられた其の不思議は、此れ程迄に悪い者を、夫れ程迄に言つて下さるお心は如何にも御不思議である、との仰せなのであります。で著しく言ふ時は、何も本願といふ大きな事ばかり頂くので無い。我々が此の行き詰つてある心中に、設ひ針の先きて突いた程でも其のお心が頂けると、夫れからづ／＼と其の廣大のお心が頂かせて貰へるのである。設ひ針の先きて突いた程でも此の仕て見やう無い／＼と泣いて居る者を、夫れを捨てぬお慈悲とは不思議ぢやと頂くとすると其の一點氣づかせて貰つたお心は、實に私の八萬四千の煩惱を殘らず知召し、其れが一々哀れだと、遣る瀬無き大悲の思召より、飽く迄其の者を照らして、見捨て給はぬ廣大のお心である。茲になつと、最早や言葉の言つて見やうが無い。此れ程迄に淺間しき私を、夫れ程の廣大の哀れみとは實に能く／＼もと、あやまり果て、お慈悲を喜ぶ外なくなるのである。

八 道德と信仰と矛盾する間は

で私など頂いたのは十七年前の事でありすが、夫れ迄の長い間の私の道德觀念は、善き事はよし、悪しき事は悪い、故

に我々は出来るだけ善く仕なければならぬ、といふのであつた。而も然らう言ひつゝ、慈悲の方は「悪くてもよいのである」と、九で矛盾した事を言うて居つたのである。「日々の日暮しの方は、悪しくてもいかぬ、出来るだけ善く仕なければならぬ」と言ひつゝ、佛の慈悲の方は「悪しくてもよい」といふの故、之では佛の慈悲の方がより言へば道徳は碎けて仕舞ひ、道徳を立てれば慈悲の方は碎けて仕舞ふ。此の矛盾を心中に置きつゝ、而もそつと胸撫で下し、「併し出来るだけ善く仕なくてはならぬ」と、實に可笑しな状態で、而も之で頂けた積りて長らく居つたのであります。併し之では何れも悪しくてもよいのであると押えて見ても、本當に満足されず、夫れかと言つて其の「善く仕なければならぬ」は、我々の惡の根性が強いもの故、其の爲めに負けて仕舞うて、いつ迄たつても本當にならぬ。『歎異抄』の御言葉には

くちには願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまははずれとおもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいらするこゝろかけて、云云。

と。皆んなが、信仰上最も苦心する處、——又「成る程惡人を助けて下さる慈悲には違はぬも、もつと喜べるやうてなくては」など言ひて、出られぬ處は、茲なのであります。

九 我等の隔て根性
處が私が御慈悲に氣づかせて貰うた一念は、今迄出来るだけ善く仕なければならぬなど思つて居つたは、以ての外の間

自分の方で然らう決め込んで然らう思つて居る迄の事にて、小供が「自分は道樂仕て居るけれども、親丈けは此の者を捨て、下さらぬ」と、親が其の爲めに日夜夜の日も合はさず心配して下さる其のお心の方は頂かずして、自分の獨り決めて然らう思つて居ると同じである。即ち然らう思つて居る心、實に遣る瀬無き親の心配を受けつけず、隔て、居る心である。て其の如き喜びは、何か煩惱事が起つて來ると、忽ち難有く無くなり、一邊に喜びが失せて仕舞ふ。而も其の失する底の喜びで、周圍を隔てながら念佛稱へ、佛は此の者を向ふより救つて下さる慈悲であると、言つて居るのであります。

一〇 「げにほこられ候へ」

處へ茲に何人か知らぬが一人の人があつて此の者に言はるゝには、「君の心や君の性分は皆な知つて居る、君の現在思つて居る位のこと、聞かぬかて皆な知つて居る、君の隔てるは、君は人ばかりに隔て、居ると思つて居るのであるけれども、人ばかりで無い、我に向ひても君は隔て、居るのである。で我が是れ丈け言ふても、中々一應二應で君は信ぜられまい。併し君が一應二應隔て、其の爲めに我が君に對する心はびくとも動かぬぞ。君は總てに就て萬事先き廻はりする性分故、君が我れに對して何う思つて居るか位は、我は疾くから分つてるのである」と此方が知らぬ思つて居る事迄、向ふは恐る可き程先き知り抜いて、此方の最も苦にして居る處を先手を以て押えらるゝと、此方はびつくりして縮み上つて仕舞ふ。處へ向ふの遣る瀬無き仰せを頂いて、「斯くの如く此方は隔て、申譯なき此の者を、隔て給はぬ大悲の有難や」と、涙を流し

違ひであつた、自分は此の通り、長い間人を隔て疑ひ、善い事處か、實に申譯け無き者であつたのである。て此の者を人が見たら、如何にも許し愛する者の無い筈である。此の悪い奴故人が悪いと見るのが、むしろ當り前なのである。然るに今「此の悪い者を、其の悪いのが哀はれと見捨て、下さらぬ慈悲とは」と、——茲で佛は悪い者を善いと言つて下さるので無い。悪い私の根性の有り切りを向ふは皆な知り抜いて下さる、其の上で其の悪い私を「悪くても悪いと思はぬ、悪くてもよい」といふて下さるのでは、此方の悪い根性が天下晴れて通れる故、夫れでは此方の心の折れるといふ處が無い。爾らば善く出来るかといふに、善く出来ぬ。——で常に言うのであります。家内にて疑ふ者は、他家に行つても疑ふ者である。家内にて争ふ者は、世間に出て争ふ者である。我々は、人と疑ひ隔たるもとは相手に在ると思つて居るのであるけれども、相手が悪しくするから此方が隔たるので無い。人に觸るれば人を斬り、馬に觸るれば馬を斬る、といふ具合に、家内に在りては家内にて悪しき性分が出て、道を走るつた人に對して、邪性の根性を以つ向うてかゝる我々なのである。て隔てる「もとは自分の心に在る。處が誰れても慈悲に向ふ時は「自分は人には隔て悪しく仕て居るけれども、佛には仕て居ぬ」と思つて居り、而して佛は其の人間同志互に相隔て、居る者を、救うて下さるのであると思つて居るのであるけれども彌々眞に自分は佛に隔て、居ぬが何うか。「人には隔て、居るけれども、佛には隔て、居ぬ」と思つて居るは、

に頂くとよいのであるけれども、動もすれば茲で、「如何にも有難いお心であるけれども、余りに悪い奴故恐れ多い」と氣兼ね心を出し、余りに慈悲の思ひがけない爲めに、此方が遠慮して引き下つて仕舞ふ。私が煩悶した時に、親が「自らは年を取つた身である、汝の苦しみに代はれるものなら代つてやり度い」と言つて下されたは如何にも難有いけれども、「夫れ程迄に親に心配かけて、實に濟まぬ」と此方が引き下つて仕舞ふ故、折角の有難き親のお心が頂けぬ。向うの言つて下さるお言葉を充分聞かぬ中に、此方が引き下つて仕舞ふから、折角の親の御苦勞が水の泡になつて仕舞ふのである。て茲になると向ふの御苦勞も一應二應で無い。向ふは此の者に何う言つて下さるかといふに、「汝に與へる爲めにこさえた財産故、汝が遠慮すると折角苦心した所詮が無くなつて仕舞ふ。汝は唯口先き丈け有難い」と言つて居るのであるが、夫れでは唯挨拶丈けである。此方のやらうといふ肝腎の金を受取つて満足して呉れるので無くては、如何程禮言ふて呉れても仕やうが無いで無いか」と。——『歎異抄』の御教化には
本願にほこるこゝろのあらんにつけてこそ、他力をたのみ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。
實にひどい御言葉である。又、
持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかてか生死をはなるべきや。かゝるあさましき身も本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。
實に「斯る仕て見やうなき貧乏人も、かゝる慈悲ある人に遇ひ奉りたればこそほこられ候へ」である。私などは長い間、此の

「ほこる」の味ひが分らなんだ。「ほこる」は「悪くてもよい」と思ふことも知れぬなど思ふて居た。處が「ほこる」は向ふの慈悲の深さに打明かされ、此方の心配がらくになることであつたのである。茲になると、實に大悲の光明に打ちほだされ、大船に乗つて、廣海に浮んだ心持である。故に『行卷』には、

大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮みぬれば、至徳の風靜に、衆禍の波轉ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到り、大般涅槃を證し、普賢の徳に違ふ也。

遣る瀬無き廣大の慈悲に打明かされ、「實に私が悪う御座りました」と、茲は慈悲に甘えるではなけれども、慈悲の深き爲め、いつの間にか、自分の心配が消え、遣る瀬無き大悲全身に充ち、暗き心があけるのである。すると斯く迄慈悲の深きも不思議、又其の慈悲で心の暗みのとれたも不思議なれば、夫れて私の腹ふくれたも不思議である。向ふの廣大の思召しも不思議なれば、夫れ頂いた此方の心持も不思議である。今迄當てにならぬ／＼と思ふて居た境遇は方角が一轉し、今迄隔つ隔てぬ、憎む憎まぬと言ふて居つた外界迄が一變して仕舞ふ。何が何か分らぬも、

念佛者は無碍の一道也、そのいはれいかんとなれば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし、罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑに、無碍の一道なり。

と頂くが之れ不思議である。これが佛智不思議の頂けた味なのであります。

『この講話次號に續く』

雜 錄

九州傳道所感

○五月一ヶ月の間九州各地に於て不可思議の御縁を蒙りて、到る處に廣大の御恵を蒙りたことである、其間各地御同朋の方々に多大の厚意をいたゞき、無限の慶喜を與へられた次第である、傳道中は晝夜寸暇なく働かせていたゞきたが、歸京已來懈意心に驅られて、一月空しく過ぎ去つた、思へば／＼横着の至りである、されど此傳道に遇はせていたゞきたる幾多の不可思議の御縁は決して忘るゝことが出来ぬ。

○九州へ参りたことは幾度であるか殆んど數ふることの出来ぬ程である、されど大抵近年は夏季の傳道が多かつたに、久しぶりに、五月に出掛けたいので九州各地の學校に於て著しく御縁をいたゞきた、福岡大學、熊本、鹿兒島の高等學校の各釋尊降誕會を初めとして、戸畑の明治專門學校に於ては佛教青年會を新たに組織せられ、枝光製鐵所に於ては養成所講堂に於て家族一同相會し、長崎に於ては醫學專門學校、高等商業學校、中學校、熊本に於ては高等學校の講話部、師範學校、醫學專門學校、鹿兒島に於ては同じく高等學校の辨論部、第二中學校等殆んど到る處の學校に於て御縁を結ばせていたゞきたことは、實に／＼唯事ならぬ因縁と深く感謝させていたゞ

くことである、來聴の學生諸君が今日信心開發されし人々は勿論、他日之を因縁とし共に入信歡喜して下さる人々の多きことを思へば、不思議の因縁を感謝せずには居られぬことである。

○特に個人としては九州に参る度毎に必ず参る大隈町の有田家を初めとして、此度初めて御因縁の開けたる飯塚の麻生家、直方の貝島家に於て法縁の純熟したること、又一昨年御縁の開けたる福岡の吉田藤吉兄の土曜會を中心として、遠く人吉町の堤家の法悦の著しきこと、羽犬塚の佛教俱樂部を中心として木屋、久留米、大牟田に於ける御同朋、長崎の正木兄の入信を縁として、諸方面の著しく開發せられたること等一々數へ來れば、殆んど無数の法喜を賜はりた、特に各地に於て熱心に求め、入信歡喜せられし人々のます／＼信心增長せられんことを深く／＼念ずることである。

○特に最も不可思議に感じたることは貝島翁の喜ばれたることである、そも／＼考へ來れば初めより其因縁の緒が引かれてある、馬關海峡を渡りて折尾驛に至りたる時、有田兄が貝島家の赤松氏と伴ひて、峠赤松兩夫人と共に汽車に於て御出遇したとき、はや宿縁開ける初であつたのである、福岡に於ては多年の間必ず原庫次郎氏方にて御厄介になるのであるが是が貝島翁の姉君である、特に今年に弟嘉藏氏が態々直方から來られて、而も歸路汽車同道して私は大隈有田方に向ふた、はや其汽車中の談話が、因縁であつた、其時申さるゝには今年に普請中であるが、來年にもなれば必ず御立寄を願ふ様にいたしたいと考へると申されたが、それが數日後には忽にして因

縁航純した。

○有田兄の弟義之介君が今は飯塚の麻生家と縁組せられた、其縁組までが不思議である、麻生家の長男が米國留學中に亡くなられた、其時有田兄の父君が飯塚の麻生家へ悔みに參られた、其時有田兄弟の打揃へるを見て麻生母君が涙んで居られた、そして其歸路はや有田父君は飯塚の宿屋に於て亡くなられた、悔みに往かれたる人の葬式が却て先になつたのである、實に我や／＼、人や／＼、今日ともしらず、明日ともしらず何事やら分からぬ、是は五六年前のことである、其有田弟君が麻生妹君と縁組せられて、法縁が熟して今年初めて麻生家へ私が参りたる次第である。

○麻生家へ着きたる時は麻生翁は不在であつた、母君を初めとして麻生兄弟、並に有田三夫婦團圓して閑かに家庭法話をなしつゝあつた、而も麻生の若夫人が加納子爵の令嬢で、是亦法の因縁が續てあるのである、忽にして人のけはい忙しく麻生太吉翁が歸りて來られたが、同時に貝島太助翁夫婦弟嘉藏翁夫婦を初めとして、峠赤松兩夫人皆一時に來られた、恰も夢の様な心地である。

○聞けば麻生翁は貝島翁に是非に聴聞に來よとすゝめられた赤松氏も是非だまされたと思ふて聞いてくれとたのまれた、貝島夫人嘉藏氏は裏からすゝめられた、義理にも一度きく氣になりて病を推して來られた、されど汽車中ても寝ながら來られた位で、長くは聞かぬ一處さへ、聞けば十分である、三十分時間程しか聞かぬぞといふて來られた。

○初對面の時話さるゝには、今より二十餘年前二週間程態々

眞宗の御法義を聴聞せられた、されど結局釋迦如來はエライ方であるが、阿彌陀如來は分からぬ、察する處釋迦如來が自分を信ぜよ、自分を拜めよとは言へぬゆへ、かく申されたものであろうと考へたところが、結局阿彌陀如來は作りたものになつたゆへに信ぜられぬやうになつたとの話であつた。

○そこで御話するには、阿彌陀如來と我々とは兩立しない、我々自分がエライものになれば如來さまの方は形も姿も消え失せて亡くなりて仕舞ふ、如來様があらはれさせらるれば我々は罪深きあさましき何も分からぬものとして首が下がつてくるのである、畢竟するに信心といふことは如來様と我々と角力とるやうなものである、如何に我等が不實なもので、不實が捨てられぬといふ眞實が如來様の御心である、其御眞實に打勝たれて我等が首が下りて不實であると如來の前にあやまりはてたが廻心懺悔である。

○九州各地で、いつも話をしたが、姥捨山の話である、不孝なる子供は親を籠に入れて奥山に捨てて行く、親は籠の中に道傍の枝を折り、草を結びて道印をして居る、子の心では、我が親を捨てたときは再び之を印に歸るつもりであらうと推測して、悉く之を催いたといふことである、そしていよ／＼奥山に行きて親を捨てたのである、その時親の申さるゝには我は歸るつもりではないが、汝の歸路を案じて心ばかりの道しるべを仕て置いた、之をたよりにかへれと申された、その時初めて親の慈悲の深さに驚きて、かくまでも不孝な私を見捨て下さらぬ親心をいたゞきた、私が九歳の時父が此話を教へて下された、奥山に枝折々々は唯が爲ぞ、親の身すてゝか

／＼と手を握りて言ひ遣したことが、今となりてひし／＼と胸にあたるといふて感涙に咽ばれた。

○私は此話をきいて一言一句實に胸にせまつた、たしかに又七翁の言語動作が即ち佛の心が宿りてある、心にもなき淨琉璃の眞似をして法をきかせたいといふ眞心は、實に釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらか無上の信心を、發起せしめたまひけりと心が溢れてある、又臨終の一言は實に飽までも見捨てぬ念力願力があらはれてある、翌朝筆をとりて書面を認むるまに／＼口占んだ。

種々に善巧方便のこゝろを
聞かせたや／＼にてさま／＼に

すかしたのみし友の眞心
攝取不捨のこゝろを

にるぐるものを追はへとらんと御佛の
心を友の言に見るかな

○此御縁によりて熊本、鹿兒島を終りて歸路貝島家へ參る因縁が熟した、偕いよ／＼着して話すに餘事はない、彼又七翁の言が翁の言ではない、翁の言をかりて如來様の親心がそのまゝあらはれて下されたのである、と御話をした、又申さるゝは、自分の親は微賤なる時に父母ともに深く佛を信じて満足して一生を終られた、それに我は今に佛を信ずることが出来ぬかと思へば残念であると申された、私も大に動かされた、唯事とは思へない、恐くは親の直々の言であらう、我等は微賤なるとき此御慈悲一つで満足して一生を終つたのである、いかに成功をせられても此御慈悲一つをいたゞきくれぬなら

へる子の爲、といふ歌がついてある、彌陀の五劫思惟の願をよ／＼案ずればひとへに親鸞一人が爲なりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述懐なされたのが全く此の思召である、五劫思惟といふも永劫修行といふも、畢竟するに此不實なる私を飽まで御見捨て下さらぬ御眞實の親心じや、道しるべじや、現に此話が今となりて見れば如來様の親心を知らして下された我親の路じるしてある、此話を又も繰返した。

○貝島翁は涙乍らに述懐談をせられた、自分の友達に三阪又七といふものがあつた、自分に何時も法義をすゝめてくれた、併自分は何時も心を傾けなかつた、近年自分のために一緒に淨琉璃の稽古をしてくれた、其間に法義の話をしてくれ、されど耳を傾けなかつた、すると又七翁のいふのには、どうか此法義の話をきいてくれ、此様に年寄りて淨琉璃の眞似をしたくはなけぬども、かくも仕たらば、彼方に法を聞いて貰ふことが出来ようかと思ふて心ばかりを運んで居るのである、と言ふた、又昨年彼が胃癌で死ぬるとき我が病床を見舞ふたれば大に喜びて、手とりて言ふには、一代世話になりてありがたかつた、此度はかねていふ通りいよ／＼御淨土へまゐらして貰ふ次第である、どうか跡から必ず往生して呉れ、待つて居るとの話であつた、その時我は答へた、御前は信心をして居つたゆへに御淨土へ參りも仕ようが、我はとも行けそうにない、御前こそ安心して參れよといふたれば、彼はいたく悲みてその様なことを言ふものではない、是非來てくれ

は何の益にも立たぬことである、是非いたゞきてくれよとの親心であらう、此親の眞心、友の眞心が、他から來たのではない、如來選擇の願心そのまゝであると申した、翁の申さるゝには、自分も色々聞いて信ずることの様に思ふたが、無學なる我が是から六ヶ布いことをきいても分かるものではない、三阪の言ふてくれたのが佛直々の御心といたゞきて、信ずるより外に致方はないと喜ばれた、いづれの行も及びがたき我等、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとの一言だにきけば是で十分である、不足はない、たとひすかされて地獄に落ちたりとも後悔すべからず候である、熊谷や津の戸三郎が法然上人の教をきゝたるとき、彼等は坂東武者にて何の學問もなきゆへに念佛をすゝめられたのである、他の者なれば道理も學問もすゝめられたであらうと時の人が噂をしたとき、法然上人の御消息に、その様なことがあるものか、いかなる愚痴無智のものも有學無學有罪無罪を問はず、たすくるための本願のまゝを説くばかりなりと申されたことを思ひあはした。

○翁の言はるゝには昨年一人の娘を失ひ、今年長男を失ふた、自分が今まで佛を信ぜられなんだばかりで、子供等の臨終に一邊の念佛をも申さしてやらなんだことが可愛想であつたと申された一言には、一家眷屬の人が皆涙をしばられた。婦人方の人々が御子息を呼び集めて、きかせやうとつとめらるゝ様子を見られて、その様に無理に言ふたとて時節がくるまでは益にたゞぬ、現に自分が其通りであつたではないかと申された。

○又も又七翁の事を思ひ出して、彼は寺の隣に住みて居ることなれば、すぐ寺へゆけるものを、五六町もある我家へわざ／＼来りて、さも次手に来たやうな顔をして、丁度門前を通りたゆへに、立寄つたが、寺へ往かうてはないかといふて誘ふてくれるのが、常であつた、わざ／＼来たのじやといふことが分かつて居るものゆへ、折々は心ならずも親切にほだされてつれられて寺に参りたとの話であつた。

○又七翁の善巧方便まことにありがたき極みであるが、夫につけても佛の我等に對する善巧方便も其通りである、子が先達つたを思がけなきことに思へど、實は親を信に入れるを目的としてわざ／＼来てくれたのであつた、他人の入信をさゝて偶然門前を通りかゝつた様に思へども、實はわざ／＼私一人のために御慈悲を見せて下さつたのである、して見れば御長男の御不幸も私が恰も御縁に遇はして貰ふたも、一通りの因縁ではない、噫弘誓の強縁は多生にも値ひ難く眞實の淨信は億劫にも獲難し、偶々行信を得ば遠く宿縁を慶べと仰せられたが實にこゝである。

○此度の九州傳道に於ていたく感じさせて貰ふたのは、人吉の堤家一族の入信のありさまである、是は昨年來法友吉田藤吉兄の御縁によりて老母、兄弟、姉妹、夫婦、いづれも／＼皆法悦の人となつて居らるゝのである不思議の事である、これにつきては私が大に懺悔さして貰はねばならぬとがある、そは他ではない、一昨年薩摩琉球傳道の歸りがけに人吉に立寄つて晝夜傳道をした、其時いかに歎異鈔の話をしても徹底しなかつた、甚だ不満足な顔をして歸りた、しかるに此度、かくの

如く迎えられて寺の門へ入りて先づ御尊像の御姿を拜むなり首が上らなかつた、實に辨圓か稻田の庵室にたづね参りた有様である、其時他の話を求められた僧分が、此度は第一の求道者として熱心に聞き且つ喜ばれた、身體の不自由な不幸な人が忽にして法悦の人となられた、出立の後人吉町有志の人々が跡から聞き傳へて聴聞に洩れた人が残念がられて、來年を待受けて下さるといふことである、山は山、道は昔にかはらねど實にかはりてたる有様である、かくなるべき因縁の結ばれてあるとも知らず、不満足な顔して歸りし時の心の耻かしさ、此度迎へられた堤家主人が昨年停車場へ私を迎へ乍ら直に我家へ歸りて寺へも來なかつたといふことである、夫故私の顔も記憶せぬといふ程であつた、しかるに今年は其家へ迎へられて薩摩の歸路には停車場へ見送り來て下されたのに、すぐ飛乗りて福岡まで來りて、吉田兄宅土曜會にて告白して、又もや夜半歸られたといふ次第である、其一族の入信の有様は實にうるはしき事である。

○モ一つ是非一言したいのは、多年親交のあつた長崎の正木新君が既に法悦の人となつて居られたとである、何んでも寺務上の事につきて少からず煩悶をせられ、多年の經營までも水泡に歸し、四方八方より迫害さるゝ感なして、冬の雪の間を歩行せられたる時、一人の乞食の小供が素足で他の小供のためにいじめられ卒てた、かれたり、雪をなげたり苦しめらるゝ様子を見て、さては可愛想に親があるであらうに、懐いてやるから來よと抱き上げんとせし時ア、ア、我が此子供である、今如來さまが汝一心正念にして直に來れ我能く汝を護らんと呼んで下さるといふたゞくなり、思はず知らず感泣したとの告白である、嗚呼宗教法案の時に上京して下さつた君、其後九州巡回の時來りた寺、又歸朝の時長崎に上陸して眞つ初めに此寺に來り君に遇ふた其後傳道の都度此寺に度々來りたが、今卓を圍みて此告白をさして、宿縁の空しからざるを感謝した、南無阿彌陀佛。

求道會館建築寄附金第七回報告

(六月末マデ)

一金九拾壹圓六拾錢也(第參回)

福岡土曜會殿

- 内譯
- 金五圓也 熊本 推葉 勝一殿
- 金五圓也 同 石塚 儀市殿
- 金壹圓也 同 中村 喜熊殿
- 金參十錢也 同 小辻 佐平殿
- 金貳圓也 同 恒松 源十殿
- 金五十錢也 同 簗尾 岡藏殿
- 金五十錢也 同 村山 みさ子殿
- 金參十錢也 同 尾方 辰次郎殿
- 金五十錢也 同 林田 傳治殿
- 金參十錢也 同 福井とらの子殿
- 金貳十錢也 同 恒松 わき子殿
- 金五圓也(第貳回) 同 堤 とよ子殿
- 金拾五圓也 同 堤 みゆき子殿

- 金壹圓也 福岡 花田 たけ子殿
- 金五圓也 福岡 原 啓殿

一金五拾圓也(第貳回) 熊本 堤 重藏殿

- 一金五拾圓也 福岡 西川 虎吉殿
- 一金參拾圓也 東京 無名 氏殿
- 一金貳拾圓也 愛知 梶井 研丸殿
- 金拾圓也 新瀉 齋藤 らく子殿
- 金拾圓也 福岡 橋詰 又三郎殿
- 金拾圓也 福岡 譽田 豊吉殿
- 金五圓也 筑前 今川 多子殿
- 金五圓也 福岡 大屋 昌殿
- 金五圓也 熊本 吉村 彦太郎殿
- 金五圓也 鹿兒島 加藤 みつ子殿
- 金五圓也 神田 水谷 さわ子殿
- 金五圓也(第貳回) 京都 高階 哲三殿
- 金五圓也 大分 東陽 圓成殿
- 金五圓也 香川 山川 薫之助殿
- 金五圓也 小石川 高嶺 俊夫殿
- 金五圓也 佐賀 池田 啓一殿

一金五圓也	同	横尾しげ子殿
一金五圓也	熊本	吉村和七殿
一金參圓也	大阪	小平邦生殿
一金參圓也	愛知	三輪信證殿
一金參圓也	高松	岩部長太郎殿
一金貳圓參拾四錢也	山口	無名氏殿
一金貳圓也	愛知	無名氏殿
一金貳圓也	下谷	石原時之助殿
一金壹圓也	筑後	白木信八殿
一金壹圓也	本所	土野茂三郎殿
一金壹圓也	島根	鈴木義駿殿
一金壹圓也	山形	淺野武内殿
一金壹圓也	廣島	大道末一殿
一金壹圓也	下谷	上田幸三郎殿
一金壹圓也	大阪	爲貴七覺殿
一金壹圓也	臺灣	古賀ちと子殿
一金五十錢也	愛媛	越智久藏殿

總計金參百六拾圓四拾四錢也

累計金壹萬九百六拾八圓九拾四錢也

右之通り二候也

大正貳年六月廿五日

世話人總代 長尾收 一
會計監督 西澤善七

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有存奉候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀

- 一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必らず御記入願上候
- 二、寄附金領取の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候
- 三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜敷

發賣所 求道發行所

東京市本郷區森川町一番地 振替口座東京一六九六番

本書内容は目次に示すが如し、先年「求道」秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は法律的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

人生之信仰

第一章 人生問題と信仰 第二章 悲觀思想と信仰 第三章 倫理力と信仰 第四章 犯罪心理と信仰 第五章 社會問題と信仰 第六章 國家秩序と信仰 第七章 世界宇宙と信仰

本書は著者が實験の信味に基づき従來求道者の金科玉條たる「救異鈔」の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と服後佛陀攝取の慈光に接して人生の曇開順に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舎城の悲劇に照し、又著者が實験を聞きて獄中安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人とも如來慈光の下唯「救濟」の道ある所以を可憐切に詳述したり。蓋し是れ「懺悔錄」の名ある所以にして一讀入信の人少なからず

懺悔錄 附録「救異鈔」

定價二十錢 八郵稅四錢 版 袖 珍 美 本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心の經過を跡づけて、懺悔感測の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、以て自ら内心の實感の披露に努めたるは既に諸君の知すせらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十二版を出すに及び本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所なり。而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が覆後の信仰經過を告白して、附録として「予が信仰的實験」なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

訂正 補増 信仰之餘瀝

定價卅錢 郵稅四錢 版 袖 珍 美 本

近角常觀 著

前號要目

求道

◎一向專修と報謝經營

講義

◎『教行信證』信卷三信釋

近角常觀

第七席

信樂釋 (釋文)

告白

◎よく／＼煩惱の興盛に候にこそ

北山齊次郎

講話

◎誠なるかな

(利非鮮妙師法話)

雜錄

◎茨木所感

近角常觀

◎信仰談話會質疑應答錄